



Fig.49 F区黒色土 遺構写真⑤（弥生土器甕出土状況、遺構図Fig.39）

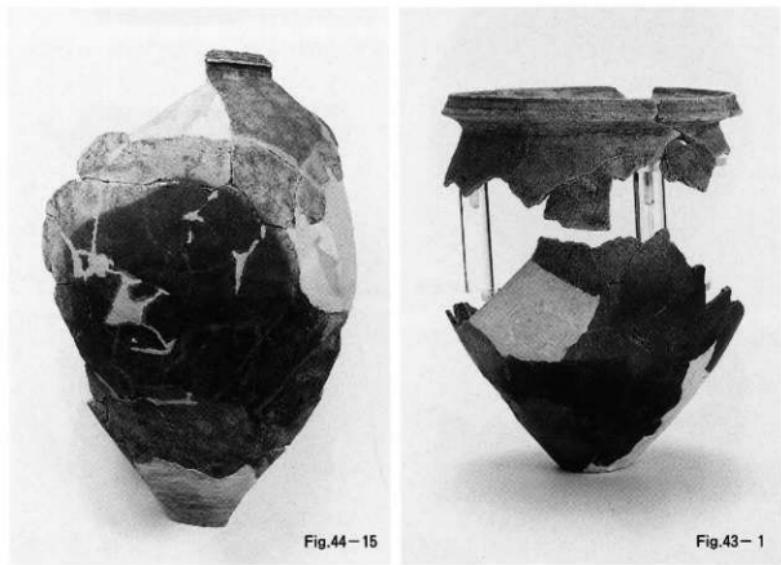


Fig.50 F区黒色土 遺物写真①



Fig.51 F区黒色土 遺物写真② (実測図Fig.43)

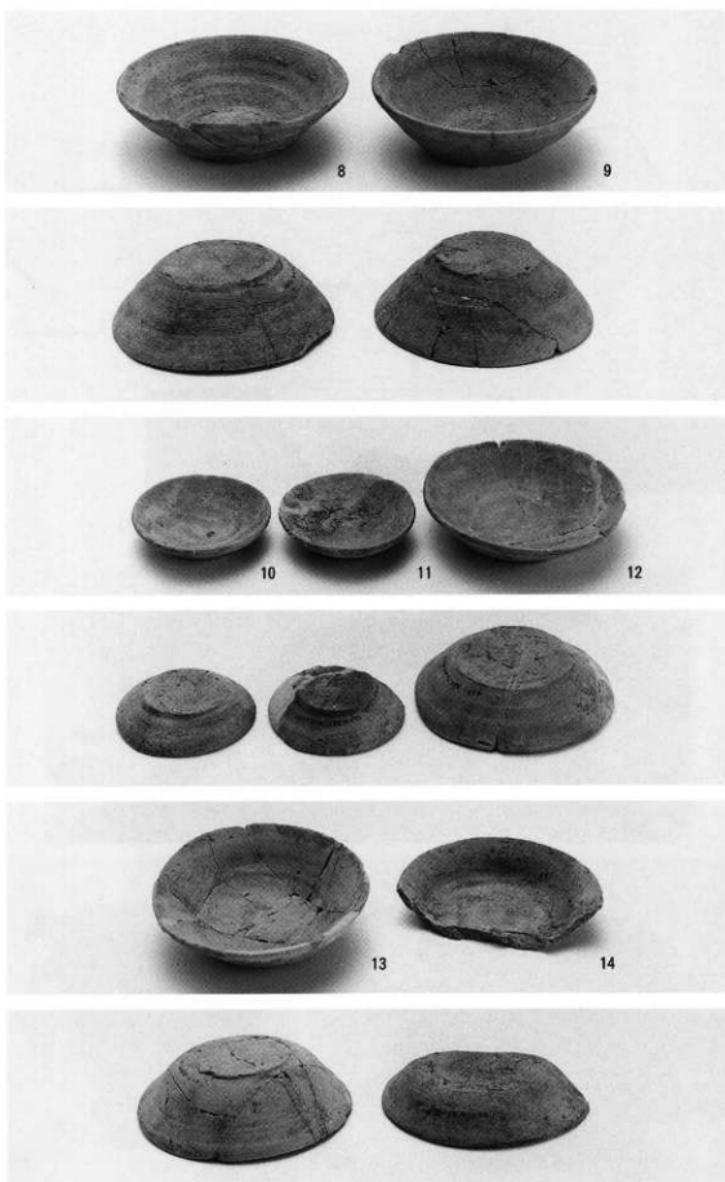


Fig.52 F区黒色土 遺物写真③ (実測図Fig.43)

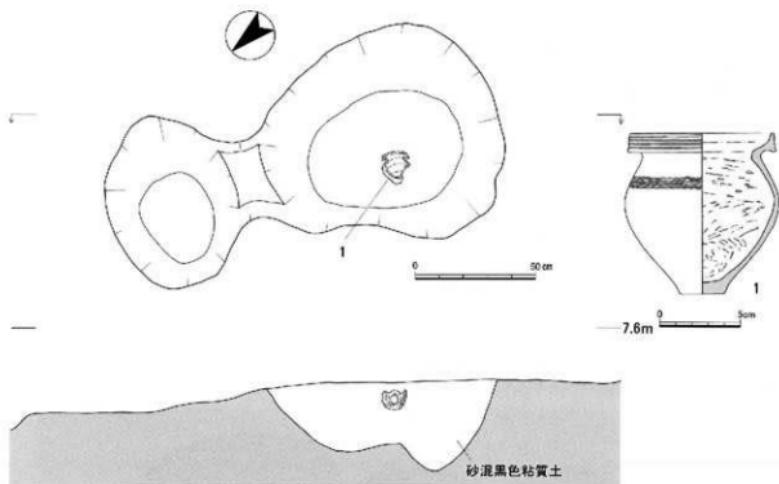


Fig.53 SK176 遺構・遺物実測図 (遺構 S = 1/20、遺物 S = 1/3)

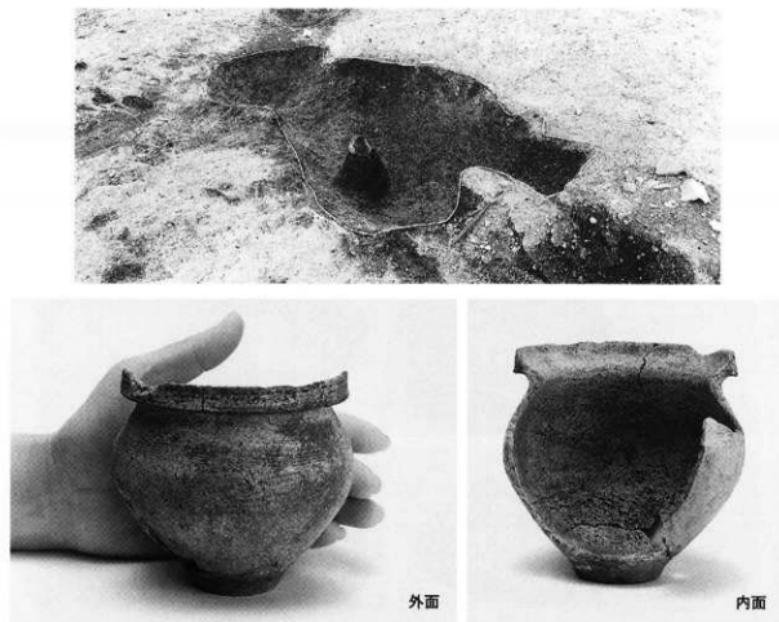


Fig.54 SK176 遺構・遺物写真

第3節 F区・中近世墓の遺構と遺物

1. 遺構の概要

F区東半では、中世後半～近世初頭の上坑墓が集中して確認されている。複数の要素から墓と認められるものは31基があった。

このうち火葬骨を納めた上坑が27基と最も多い。これらに共通する特徴として下記の点があげられる。

- ・土坑は検出面からの深さ50cm以内と比較的浅く、黒色の埋土で満たされた。
- ・埋土中に熱を受け白色化した骨片が多量に含まれる。骨片は埋土中に散在し、小片化している。骨同士は本来の位置関係をとどめない。
- ・埋土中には木炭片や灰を多量に含んでいる。
- ・埋土上層から土師質土器壺・皿が1～4点出土する。
- ・銭貨が納められているものがある。

これらの上坑は出土状況からみて火葬墓と判断される。骨片が埋土中に散在することや、骨片総量が少なく一體的に満たないことなどからみて、他所で茶尻に付された火葬骨が集められ、灰・木炭ごと土坑に埋納されたものとみられる。これらの火葬墓には土師質土器が納められる以外に副葬品は一切みられず、陶磁器なども出土しない。わずかにSK210で龍泉窯系青磁碗（C2類雷文、15世紀後半～16世紀初頭）のごく小片が出土しているが（Fig. 91）おそらく混入であろう。ごく例外的に銭貨が出土するもの（SK01・SK180）があり、六道錢として併せて埋葬されたと考えられる。

上記の火葬墓以外に、人骨が位置関係を保って出土する土葬墓がいくつか確認されている。前節で述べたF区黑色土のSX01とSX02のは

か、SX04・SX10が該当する。上坑は浅く、土師質土器以外に目立った副葬品などもない。棺形状などは不明だが、横向きに膝を曲げて寝かされた状態が復元される。

それ以外に、人骨などは全く遺存していないが、やはり上葬墓とみられる土坑SK12などがある。SK12からは副葬された完形品の肥前系陶器皿と土師質土器各1点が出土している。陶磁器と土師質土器を併せて副葬する上坑墓はこの1例のみである。

なお、上記の火葬墓と土葬墓以外に、埋葬土坑かどうかは断言できない土坑が多数確認されている。土師質土器のみ出土した土坑が73基、土師質土器と陶磁器小片が併せて出土した土坑が8基あった。土師質土器は図示できない程度の小片が多く、副葬されたとは考えにくい⁽¹⁾。これら多数の土坑はいずれもF区東半に集中している⁽¹⁾。

2. 土坑墓の時期

土師質土器以外の遺物が納められる例が少なく、詳細な時期を知ることは困難である。

上葬墓SK12は砂日積の肥前系陶器皿を副葬されており、17世紀後半頃のものとみられる。

これに対して火葬墓は陶磁器併存例がほとんどない。わずかにSK210から龍泉窯系青磁碗（口縁雷文帶C2類）の小片が出土しており、この年代が15世紀後半～16世紀初頭であることから、火葬墓SK210はこの年代をさかのばらない。他の土坑墓については、時期の決め手は土師質土器しかない。土師質土器については先行研究によりいくつかの編年が提示されており、大枠での変遷觀は明らかになりつつあるものの、地域差・個体差が大きいために個々の資料から年代を断定するのは難しい。近年では、より小地域内での分類・編年の試みとして、当遺跡の出土資料を扱った

(1) 比較的大きいSK22・SK250・SK284・SK294・P69出土のものについてはFig. 91・92に写真を掲載した。

(2) これらの土坑については次節でまとめて取り扱う。

いわば遺跡内編年案が示されているが⁽¹⁾、中世後半については良好な陶器器供伴例が少なく依然として不確定な部分が多いといえる。

上記の理由から、器高が比較的低く、口径と底径の差が小さいなどの特徴をそなえた火葬墓出土の本例は大まかに中世後半、15~16世紀のものと判断するにとどめる。なお、土葬墓SK12出土の上師質土器皿（17世紀後半以降）は側面下端（底部との境界）がシャープにとがり、火葬墓出土のものとは形態が異

なるもので（Fig. 56）、17世紀代に器形の大きな変化が起きたことをうかがわせる。

また、SK199、221、225では肥前系陶器の小片が埋土中に混入しており、またSK216からは寛永通宝1点が出土している。これらから火葬墓の一部は年代が17世紀代まで下るところが明らかである。結論として火葬墓の年代は15~17世紀が中心であり、17世紀代の間に火葬墓地としての土地利用は終焉したのである。

Tab. 10 F区中近世墓一覧表

埋 土 中 遺 物		遺構名	火葬骨片	木炭片	土師質土器	その他の遺物
火葬骨片・木炭片・土師質土器を含むもの		SX05	○	○	○	
火葬骨片・木炭片		SX07	○	○	○	
火 葬 墓	SK205		○	○		
	SK210		○	○	○	青磁片
	SK222		○	○	○	
	SK298		○	○	○	
	SK299		○	○	○	
	SK180		○	○	○	北宋銭7
	SK221		○	○	○	肥前系陶器片
	SK192		○	○		
	SK196		○	○		
	SK199		○	○		肥前系陶器片
土 葬 墓	SK297		○	○		
	SK212		○	○		
	SK307		○	○		肥前系陶器片
	SK198		○		○	
	SK195		○		○	
	SK216		○		○	寛永通宝1
	SK181		○		○	
	SK224		○		○	
	SK231		○		○	
	SK183		○			
土 葬 墓	SK191		○			
	SK204		○			
	SK223		○			
	SK225		○			
	SK301		○			
	造構名		土葬骨		土師質土器	
土 葬 墓	SK12				○	肥前系陶器皿
	SX04		○			
	SX10		○		○	
	SK01		○		○	北宋銭2

(1) 烏県教育委員会1999『古志本郷遺跡I』



Fig.55 F区土坑墓分布图 ($S=1/300$)

3. 遺構の詳細

中近世墓と、その可能性を含む上坑について、詳細を以下で記述する。なお記述順は遺構図の掲載順である。

S K 1 2 (Fig. 56) 17世紀後半（以降）の上葬墓である。F区の南西隅に位置する（周辺図Fig. 29）。現地表下50cmで検出した。

地山の砂層に掘り込まれた上坑で、平面形はややいびつな梢円形をなす。長短径90cm×110cm、残存深さは中心部で50cmであった。土坑底はほぼ平坦、壁面との境界はなだらかで、壁の立ち上がりも傾斜をもつ。概して丁寧に掘られたものではない。

埋土は黒味が強く均質で、分層できない。遺構の東側に寄った位置、埋土の中位から肥前系陶器皿と土師質土器皿が各1点出土している。いずれも完形品で、人為的に埋納されたものとみられる。陶器皿は天地逆の伏せた状態で、土師質土器は天地正位置であった。

調査区外であるSK12の南方至近距離には放水路事業が行われるまで使用されていた墓地の高まりがあり、これらと一連の土坑墓とみられる。F区で多く見られた火葬墓のような骨片が含まれないことから、土葬墓であろう。梢円形や埋葬姿勢などは一切痕跡が残されていないため不明である。副葬品とみられる陶器、土師質土器皿は位置からみて棺内に納められていた可能性があるが、定かではない。

肥前系陶器皿は砂目積みで外面下半を露胎とし、高台削り残しの兜巾がみられる。こうした特徴から生産地の編年で17世紀後半とされるものである。SK12は土葬墓で出土遺物の一括性が高く、陶磁器と土師質土器の確実な供伴例として貴重な事例である。供伴する土師質土器皿は口径11cmの大皿で、前項で述べたように側面下端が外側へ反り鋭く稜をなす特徴的な器形をもつ。底径は8.6cmで口径との差が小さい。同様の器形は本書掲載の包含層出土（Fig. 12-43・45）にもみられるもので、これらが17世紀後半の一定期間に一般的に生産されたものと判断される。なお内面にかすかに小黒斑があり、灯明皿として使

用された際の油煙痕とみられる。

SK12に隣接する2基の土坑SK15、SK16は規模や形状が類似しており同様の土葬墓である可能性があるが、一切の出土遺物が無く詳細は不明である。

S K 5 8 (Fig. 58、60) 骨片や木炭などの埋葬（火葬）とともに痕跡がみられなかつたため、墓である確証はないが、可能性があるものとして図示した。最深部の深さ60cmある比較的深い遺構で、埋土中位から十師質土器2点が出土している。いずれも側部を欠いた底部の破片で、破面が規則的に全周を包むようにまわることと、破面がシャープで風化していないことから、人為的に破碎した可能性もあるが詳細は不明である。

S K 1 9 5 (Fig. 59、61) 埋土中に火葬骨片が含まれることから火葬墓と見られる。土質で峻別できなかったが、複数の遺構が重複している可能性が高い。埋土は上下2層に分層され、骨片と土師質土器は上層から出土している。土器は小片であるため意図的な副葬かどうか判断できない。

S K 1 8 0 (Fig. 62) 中世の火葬墓とみられる。F区東寄り、火葬墓の集中する地点に位置している（周辺図Fig. 33、55）。遺構検出時には判別できなかったが、無関係の別の上坑に切られていることが土壙断面から観察された。本来の土坑規模は直径1.4m前後の梢円形に復元される。

上坑は二段掘りの形状をなし、南東側が一段低い。残存している深さは南東側の最深部で約30cmと浅いが、遺構上部は後世の削平を受けているため本来の深さはそれ以上であろう。埋土は黒味の強い均質な上で層位の別は認められなかったが、南東側の深い部分に被熱した白色の骨片と灰片が多量に集中しており、この一画にまとめて火葬骨と灰片を埋納したものと判断される。この直上から十師質土器1点、またその北西側の一段高い部分から銅錢7点と土師質土器1点が出土している。これらは埋葬時に副葬されたもので、

銭貨は六道銭として納められたと判断される。

7枚の銭貨は3つのまとまりに分けて置かれていた。銭種は観察表Tab. 11に記しているが、すべて初鎌11世紀前半頃の北米銭である。一部は表面に小気泡が生じたり、銭文が不明瞭になるなど熱を受けた痕跡が認められる。身についた状態か棺内に納められたものが茶毬に付された際に熱を受けた例も知られるが⁽¹⁾、本例は骨片と分けた位置に置かれており、茶毬後に銭貨が選別されたのでなければどの段階で被熱したのか明らかでない。

土師質土器の大まかな器形の特徴変化から中世後半、15~16世紀の構造と考えられる。

S K 1 8 1 (Fig. 64, 67) 火葬墓の集中域から西に30mほど外れた地点に単独で位置する（周辺図Fig. 55、30）。長短径105cm×80cmの楕円形、深さ約30cmの土坑である。埋土は單一層で、均一に火葬骨片が含まれることから火葬墓と判断される。

埋土上層の検出面近くで、土師質土器皿2点と壺1点が重なりあった状態で出土した。埋葬時に納められたものとみられる。

S K 2 4 7 (Fig. 65) 骨片など一切含まず、墓である可能性は低い。深さ50cmの土坑で、埋土中に土師質土器皿が含まれている。

S K 2 8 0 (Fig. 66) 火葬墓の集中域からわずかに北に外れた地点に位置する（周辺図Fig. 55、33）。骨片など含まないため墓ではない可能性もあるが、比較的整然とした十坑形状や土師質土器の出土状況は火葬墓と共通するものである。出土した土師質土器は他の火葬墓出土例とやや異なる形態上の特徴をもつ。すなわち器高がやや高く、側部の立ち上がりが急で深みをもつ器形であること、側面のナデが下端まで及び、底部との境界がなだらかであること、などである。こうした特徴は中世でも早い時期にさかのぼる可能性があるが、いずれにせよ前述のとおり単体の形

態的特徴で時期を断定できるものではない。

S K 1 9 2 (Fig. 70) 平面規模150cm×80cm、平面長楕円形の火葬墓である。残存していた深さは10cm余りと非常に浅い。北東側に土坑底に接して10cm×30cmほど平たい面をもつ亜円蹠3個が並び、この上に火葬骨と木炭片が集中して堆積していた。上器などは一切出土していない。

腰の性格、機能は明らかでないが、表面に明確な被熱痕跡などは認められないため、他所で茶毬に付された骨片が回収されて埋葬されたとみられる。後述のSX06で検出された被熱石組みとは性格が異なるものであろう。

S X 1 0 (Fig. 71) 火葬墓の集中域の西側に位置する上葬墓である（周辺図Fig. 31、55）。頭骨の一部とわずかに歯牙が残存していたが、他の組織は完全に分解されており痕跡も残さない。

造構埋土には他の骨片や木炭片などが含まれない。この造構は奈良時代の溝SD12の黒色埋土中に掘り込まれていたため、造構の輪郭は判然とせず、断面でも造構埋土を認識することができなかった。頭骨を取り上げた後に周辺を全体に掘り下げたところ、頭骨から40cmほど離れ30cm深い地点で土師質土器壺1点が出土した。壺は完形に復元されるもので、奈良時代の溝SD12の埋土には含まれないものであるから、SX10に伴い副葬されている可能性が高い。

S X 0 4 (Fig. 72) 火葬墓の集中域西端に位置する土葬墓である（周辺図Fig. 31、55）。造構の平面形は125cm×50cmの長方形で、残存深さは15cm余りと浅く、底面は平坦に掘られている。土坑の輪郭はおそらく棺形状を示すものと考えられる。

北東側小口近くから頭骨の一部が、また南寄りの地点から腓骨・脛骨と大腿骨が出土しており、膝を曲げた横向き姿勢で東側を正面

(1) 八束郡八室村の谷ノ奥遺跡で報告されている。八室村教育委員会2002『谷ノ奥遺跡』

に埋葬された体位がよみとれる。人骨の出土位置は土坑底や壁面に接していることから、埋葬に際して棺がちょうど納まる程度の土坑が掘られたことがわかる。

埋土中から十師質土器の微小片¹が出土しており、周辺の埋葬と同じ15~17世紀の期間のものとみられるが詳細は不明である。

SK01~SK11、SK13 F区の西端近くで密集して検出された上坑群である。遺構の全体図はFig. 29に、写真はFig. 78に掲載している。

土葬骨片が含まれるSK01以外は墓である確証はない。いずれも円形、楕円形の小規模な浅い上坑で、残存深さは20cm以内と非常に浅く、黒色の單一埋土で満たされる。SK01、SK02、SK07からは副葬された可能性のある土師質土器が、SK01から北宋錢2点が出土しているが、それ以外の上坑からは一切の出土遺物はない。

これらの土坑群は本章第2節で述べたF区黒色土と接する位置にある。F区黒色土中からは中世後半とみられる上葬骨と供獻・副葬された土師質土器が出土していることから、本土坑群も墓である可能性が考えられる。

SK01は埋土中に土葬骨の小片が含まれること、土師質土器壺と錢貨2点が出土していることから確実な土葬墓とみられる。骨の部位は不明である。

SK02は60cm×35cmのいびつな楕円形上坑で、埋土から十師質土器皿1点が伏せた状態で出土した。またSK07からも土師質土器皿2点が出土している。2点とも内外面に皮膜状の有機物が厚く付着しており、これらが未分解のため異臭を放つ。ごく一部に油煙痕と見られる煤状の黒斑があり、灯明皿として使用されたものと考えられる。

SK05 土坑墓が集中するF区東側に位置する火葬墓である(周辺図Fig. 55)。Fig. 78に写真のみ掲載した。平面輪郭は溝跡SD17の埋土と識別しにくいか、骨片と木炭片の集中する範囲からみて長軸60cmほどの楕円形土坑と判断される。埋土中には火葬骨片と木

炭の小片を高い密度で包含している。他に遺物は無い。

SK06 (Fig. 82) 石を敷き並べた浅い土坑で、火葬墓または火葬の為の施設とみられる。火葬墓の集中域内に位置している(周辺図Fig. 33、55)。

石は拳大~人頭大の角礫で、90cm×50cmの範囲に13個ほどが隙間無く置かれる。その中心に木炭片と火葬骨片が集中する部分が認められた。骨は細片化しているが木炭は比較的大きく、長さ10cmを超えるものが多く含まれている。他の火葬墓でも木炭片は共通して含まれているがいずれも小片で、このように形状を保った木炭はない。遺構の残存深さが10cmほどと非常に浅いこと、全面に石を敷き並べた特殊な構造などからみて、最終的な埋葬施設ではなく火葬、荼毘をおこなうための炉のような施設の可能性がある。なお遺物は一切出土しなかった。

SK07 (Fig. 83) 上師質土器4点を副葬した火葬墓である。火葬墓集中域の南寄りに位置する(周辺図Fig. 33、55)。検出時にはL字形をなす遺構に観察されたが、最終的には別の遺構と重複していることが確認された。平面形75cm×35cmの略楕円形をなす。西側の端寄りに長さ30cmの円礫が置かれている。この表面が赤く変色し、また黒色の煤が付着することから熱を受けたことがうかがえる。また東側には土師質土器皿1点が伏せた状態で、3点が立てた状態で並べて置かれていた。礫の表面が被熱している点からみるとこの遺構内で火葬が行われた可能性もあるが、土師質土器が整然とした配置で置かれていたことからみて最終的な埋葬もこの土坑内でおこなわれたと考えられる。

副葬されていた土師質土器皿は4点とも法量がほぼ等しいもので、口径8.5cm、底径6cmほどの小型のものである。いずれも成形が粗く、口縁は波打ち、内面には粗い回転ナデ痕を残す。

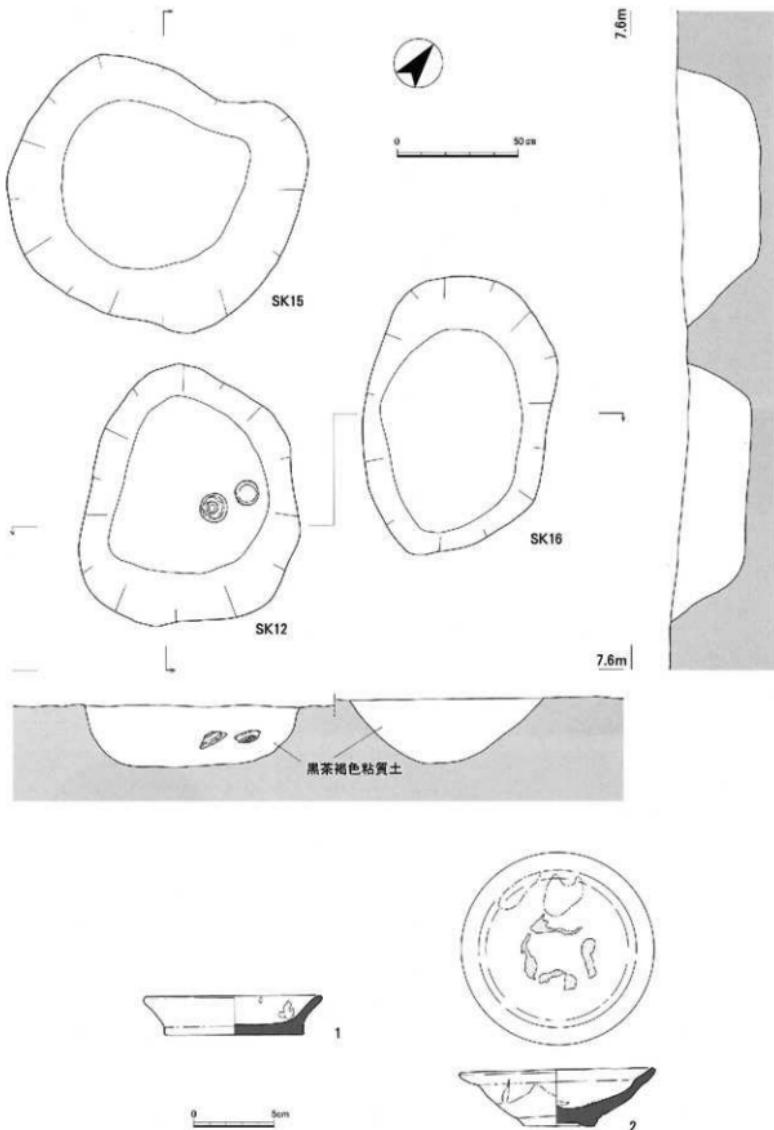


Fig.56 SK12 遺構・遺物実測図 (遺構図 S = 1/20、遺物図 S = 1/3)



上：南東から撮影
左：西から撮影

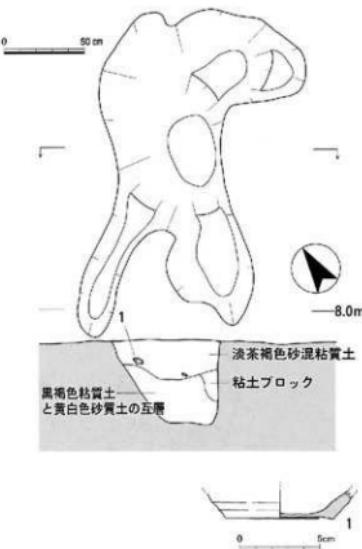
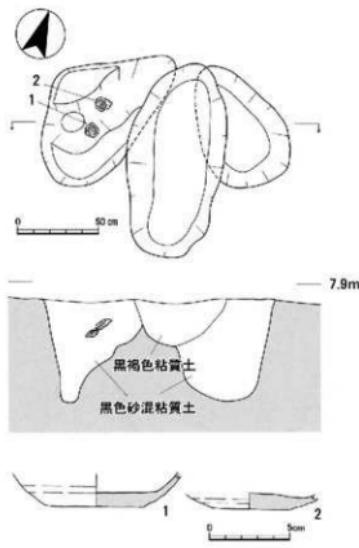


2 - 内面



1 - 底面

Fig.57 SK12 遺構・遺物写真



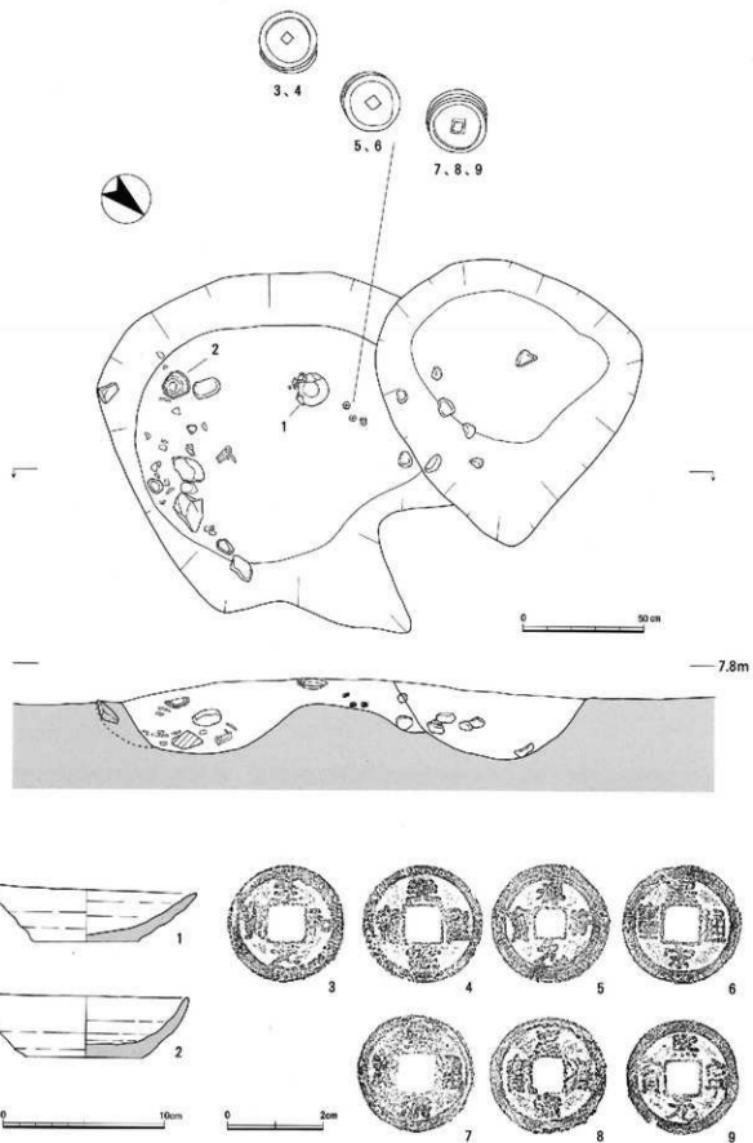
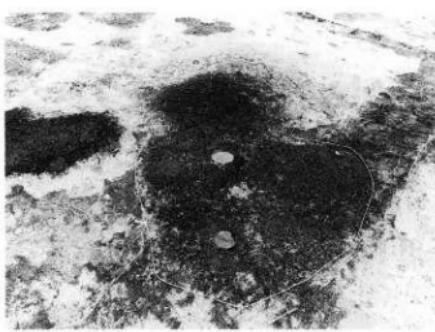


Fig.62 SK180 遺構・遺物実測図 (遺構S=1/20、遺物1/3・等倍)



上面検出時



埋土の堆積状況



完掘時



1

2



1



2

Fig.63 SK180 遺構・遺物写真

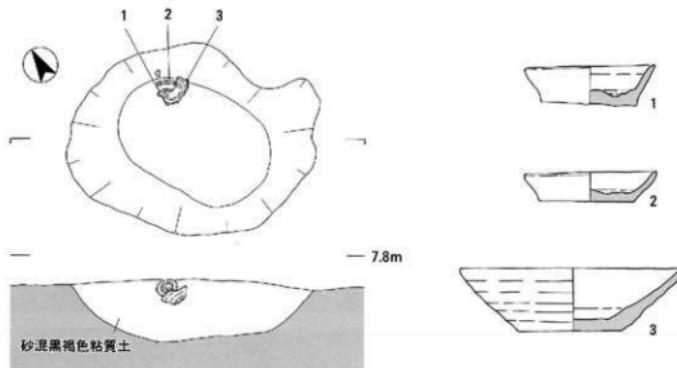


Fig.64 SK181 調査・遺物実測図 (造構 S = 1/20、遺物 S = 1/3)

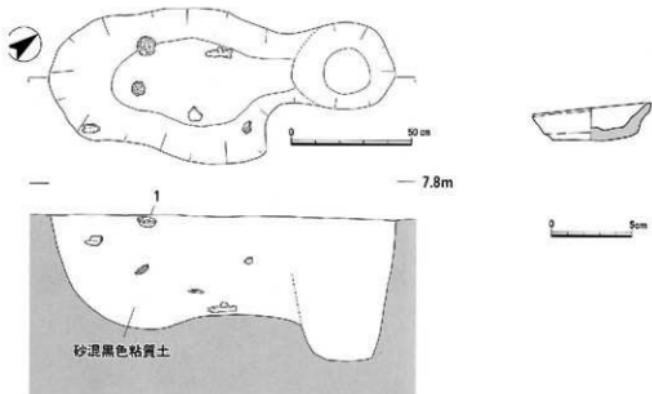


Fig.65 SK247 調査・遺物実測図 (造構 S = 1/20、遺物 S = 1/3)

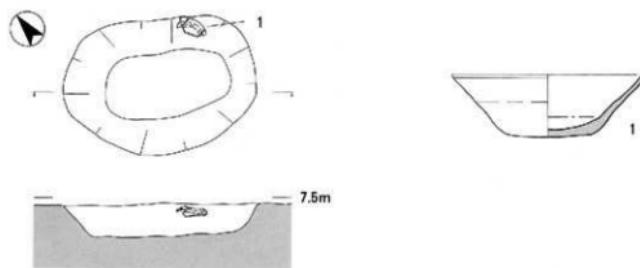


Fig.66 SK280 調査・遺物実測図 (造構 S = 1/20、遺物 S = 1/3)



Fig.67 SK181 遺物写真



Fig.68 SK247 遺物写真



Fig.69 SK280 遺物写真

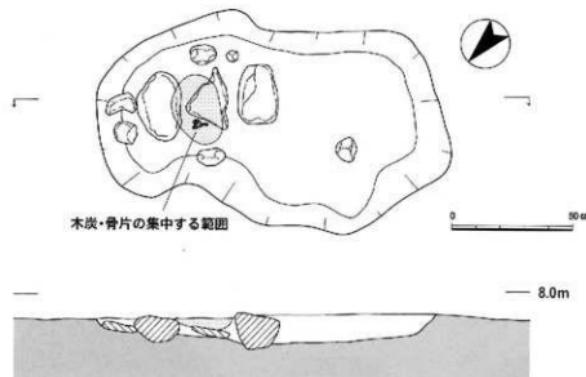


Fig.70 SK192 遺構実測図 (S = 1/20)

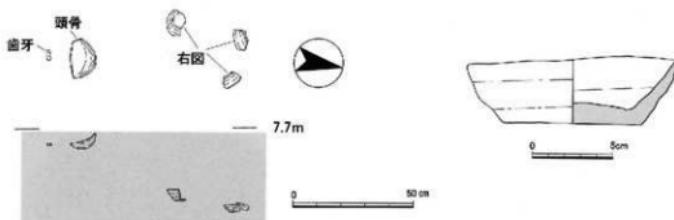


Fig.71 SX10遺構・遺物実測図 (S = 1/20・1/3)

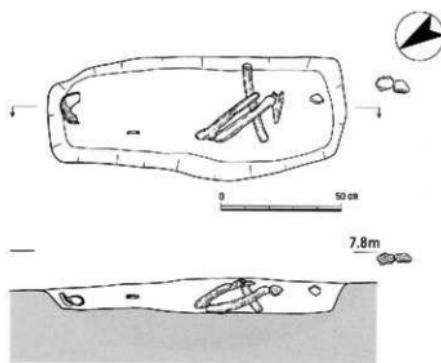


Fig.72 SX04 遺構実測図 (S = 1/20)



Fig.73 SK01 遺物実測図
(S = 1/3、写真はFig.78・79)



Fig.74 SK02 遺物実測図
(S = 1/3、写真はFig.78・80)



Fig.75 SK07 遺物実測図
(S = 1/3、写真はFig.78・81)



Fig.76 SX10 遺構・遺物写真
(1: 遺構検出状況、南から 2・3: 出土遺物)



2



3



1



2

Fig.77 SK192 遺構写真 (1: 南西から、奥はSK180とSX06 2: 半裁時、南東から)

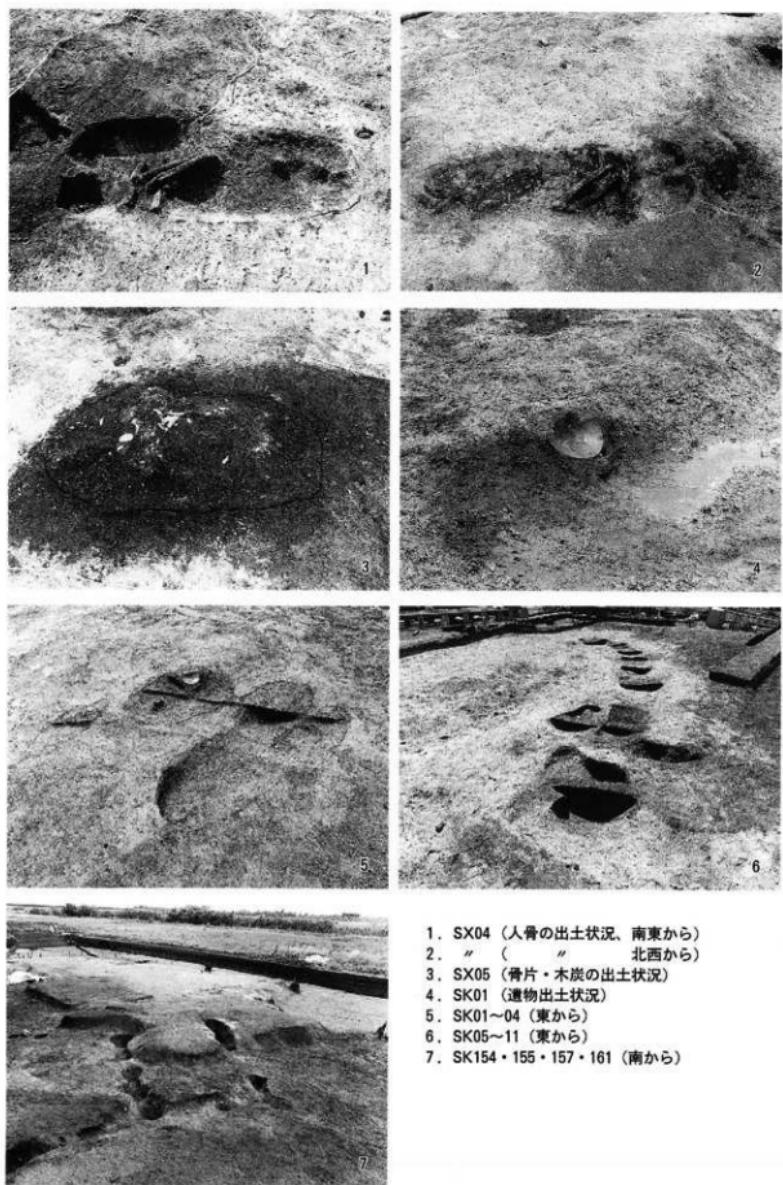


Fig.78 F区 土坑遺構写真



Fig.79 SK01 遺物写真



Fig.80 SK02 遺物写真



Fig.81 SK07 遺物写真

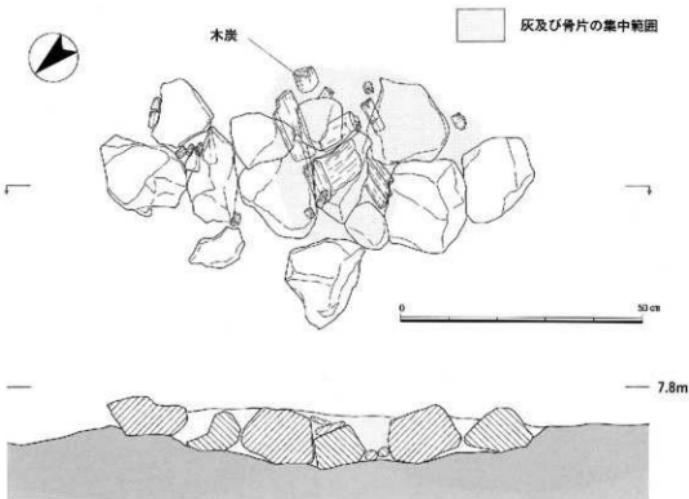


Fig.82 SX06 遺構実測図 (S=1/10)

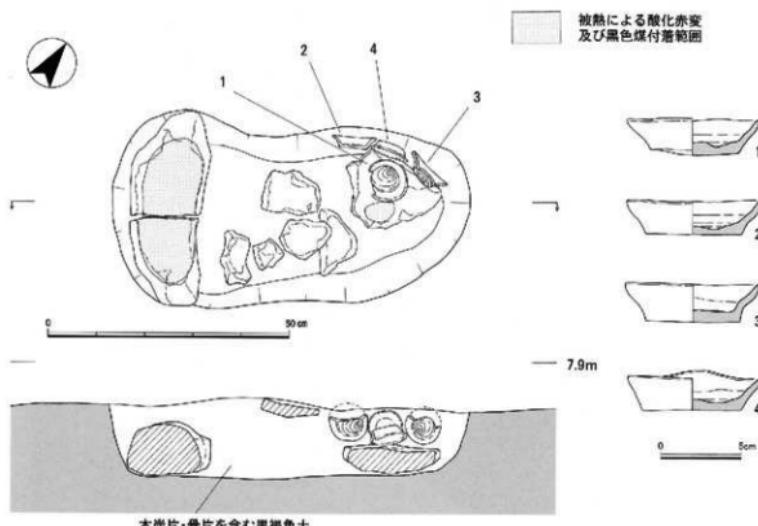


Fig.83 SX07 遺構・遺物実測図 (道構図 S=1/10、遺物図 S=1/3)

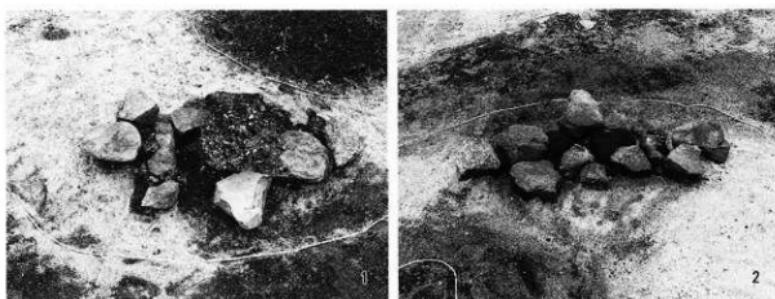


Fig.84 SX06 遺構写真（1：骨片、木炭の集中状況、北西から 2：同除去後、石組みの状況、南東から）

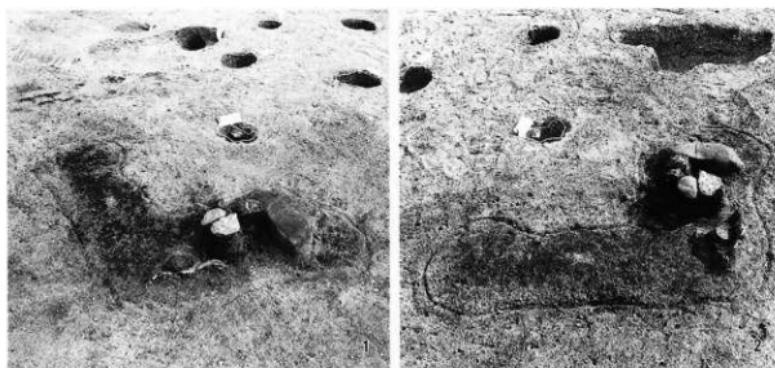


Fig.85 SX07 遺構写真（1：北から 2：北東から）

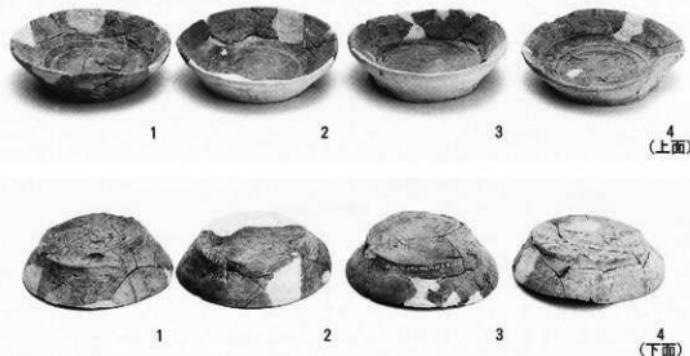


Fig.86 SX07 遺物写真

Tab.11 F区中近世墓出土遺物 観察表 (実測図・写真Fig. 56~86)

遺構名	番号	種別	器種	法量(cm)			色調	調整(内面/外面/特記事項)	残存度	
				口径	器高	底深				
SK12	1	土師質上器	皿	10.9	2.4	8.6	明 棕 色	内外面:回転ナデ、内面の一部に油煙痕 底面:回転糸切り	完形	
	2	肥料系陶器	皿	12.2	3.4	4.2	土上褐色 砂口模様	外面部下半露胎/高台削りだし、 兜巾模様	完形	
SK58	1	土師質土器	环	-	-	6.0	明 棕 色	内外面:回転ナデ/底面:回転糸切り	底部のみ、 30%	
	2	土師質土器	环	-	-	5.6	明 棕 色	内外面:回転ナデ/底面:回転糸切り	底部のみ、 30%	
SK195		土師質土器	环	-	-	6.8	に ぶ い 棕 色	内面:回転ナデ/外面:体部回転ナデ、 底部回転糸切り	全体の 40%	
SK180	1	土師質土器	环	13.0	3.3	6.4	浅黄褐色	内外面:回転ナデ/底面:回転糸切り	90%	
	2	土師質土器	环	13.0	3.8	7.2	灰黄褐色	内外面:回転ナデ/底面:回転糸切り	50%	
銘名				銘文	時代	鉄径 (mm)	内径 (mm)	錢厚 (mm)	両口 (g)	備考
3	至和元宝(良)	1054	北宋	24.4	18.3	1.0	3.00		3、4が鈴音	
4	天聖元宝(篆)	1023	北宋	25.0	20.5	1.0	3.13			
5	祥符元宝	1008	北宋	24.9	18.1	1.1	3.20		5、6が鈴音	
6	皇宋通宝(良)	1039	北宋	24.9	19.6	1.1	3.15			
7	聖宋通宝(良)	1039	北宋	21.5	20.3	1.1	3.32			
8	熙寧元宝(良)	1068	北宋	23.8	18.3	1.3	3.51		5、6、7が鈴音	
9	皇宋通宝(篆)	1039	北宋	24.8	19.7	1.1	3.68			
種別				法量(cm)		色調	調整(内面/外面/特記事項)	残存度		
SK181	1	土師質土器	皿	8.3	2.4	5.8	明 棕 色	内外面:回転ナデ/底面:回転糸切り	完形	
	2	土師質土器	皿	8.2	1.9	5.8	明 棕 色	内外面:回転ナデ/底面:回転糸切り	完形	
	3	土師質土器	环	14.0	3.9	6.4	浅黄褐色	内外面:回転ナデ、指揮さえ/底面:回転糸切り	80%	
SK247		土師質土器	皿	7.5	2.0	4.0	明 棕 色	内外面:回転ナデ/底面:回転糸切り	ほぼ完形	
SK280		土師質土器	环	12.0	3.9	4.5	浅黄褐色	内外面:回転ナデ/底面:回転糸切り	70%	
SX10		土師質土器	环	13.0	3.9	7.8	明 棕 色	内外面:回転ナデ/底面:回転糸切り	完形	
SK01	1	土師質土器	环	13.8	3.7	6.4	浅黄褐色	内外面:回転ナデ/底面:回転糸切り	80%	
	銘名				銘文	時代	鉄径 (mm)	内径 (mm)	錢厚 (mm)	備考
		淳化元宝(草)	990	北宋	24.7	18.4	1.1	2.74		
		元祐通宝(真)	1078	北宋	23.6	18.4	1.0	2.66		
種別				法量(cm)		色調	調整(内面/外面/特記事項)	残存度		
SK02		土師質土器	皿	7.5	2.2	3.8	浅黄褐色	内外面:回転ナデ/底面:回転糸切り	完形	
	1	土師質土器	皿	6.6	1.5	4.5	オリーブ 黃 色	内外面付着物により調整不明	全体の 70%	
SX07	2	土師質土器	皿	7.0	1.9	4.6	オリーブ 黃 色	内面:付着物により調整不明/外面:体部回転ナデ、底部静止糸切り	全体の 60%	
	1	土師質土器	皿	8.3	2.1	5.2	明 棕 色	内外面:回転ナデ/底面:回転糸切り	90%	
SX07	2	土師質土器	皿	8.3	2.1	5.8	灰黄褐色	内外面:回転ナデ/底面:回転糸切り	50%	
	3	土師質土器	皿	8.5	2.4	5.7	灰黄褐色	内外面:回転ナデ/底面:回転糸切り	60%	
	4	土師質土器	皿	8.5	2.1	6.1	浅黄褐色	内外面:回転ナデ/底面:回転糸切り	90%	

第4節 F区水田遺構とその他の土坑・溝出土遺物

前節までに、F区の主要な成果である弥生時代の包含層と中世後半～近世初頭の上坑墓群について記述した。本節では、それ以外のF区における調査成果を扱う。なお奈良時代の官衙に伴う建物跡と溝跡、鐵冶関連遺物などについては第8・9章で扱うこととして、ここでは触れない。

本節の具体的な内容は、F区西端で確認された近世以降の水田遺構と、その他の土坑・溝出土の遺物である。

1. F区水田遺構

F区の西端では水田耕作にともなう遺構を確認している。東西に長い古志本郷遺跡のなかでF区は最も西寄りに位置し、町屋が発達する足がかりとなった旧石州街道からは300mほど離れている。(位置図Fig. 3) II区などでは街道沿いに発達した近世の建物遺構が多数確認されているのに対して、この街道から離れるにしたがい近世の遺構密度が低くなる傾向がうかがえる。現在の土地利用状況を見ても丘陵地として集落が広がるのはG区の辺りまでで、F区の周辺は水田として利用されている(周辺図Fig. 4)。こうした周辺の環境から、発掘対象は水田域と調査が必要な遺跡の境界を確認することを目的に、ごく一部に限定して実施した。

確認した水田遺構はF区の北西角に位置している。F区全体図はFig. 27に、水田遺構周辺の遺構図はFig. 29に示した。上記の調査目的により、調査対象とした水田面積は150畝ほどとごく小範囲である。密に打たれた杭列による十手に区画され、その内側に複数の耕作土層が堆積している。土層の断面図はFig. 8、9に示し、その堆積状況については、第4章第1節の「遺跡の基本構造」で詳しく述べたとおりである。基本的に水田のベースとなる層の上に、耕作時の底土となる黒色土と洪水砂が累重している。時間を追って徐々に耕作面は高くなっていくことがうかがえる。

堆積土中にはほとんど遺物が含まれず、水田が機能していた時期を詳細に知ることは難しい。このうち最下層にあたる初期の耕作土層の時期を示すものとして、集石遺構SX03があげられる。

SX03は水田区画の東寄り、調査区北壁の際に位置している。耕作の障害となる礫をまとめ置いたものとみられるが、この中に陶磁器の破片が含まれていた。これらの遺物は非掲載としたが、肥前系磁器碗にコンニャク印判を押したもののが数点含まれ、生産地の編年で18世紀中頃のものと認められる。使用期間と破損品が水田付近に廃棄され耕作土に混入するまでの期間を見込めば、これらの集石遺構は18世紀後半より新しいものと考えられる。従って遺物から確認できる耕作の上限年代は最も古く見て18世紀後半と結論づけられよう。

ただしこの最下層耕作土がそれ以前の耕作土を掘り下げて整地したものであれば、当地点での水田利用はさらに古くなる可能性がある。その点については調査では確認できていない。

なお、この水田域となっている範囲については地山である砂疊層がひときわ低くなってしまい、中世以前の遺構は全く残されていない。従って、水田として利用されていたF区の西隣と北隣については調査対象から除外している。

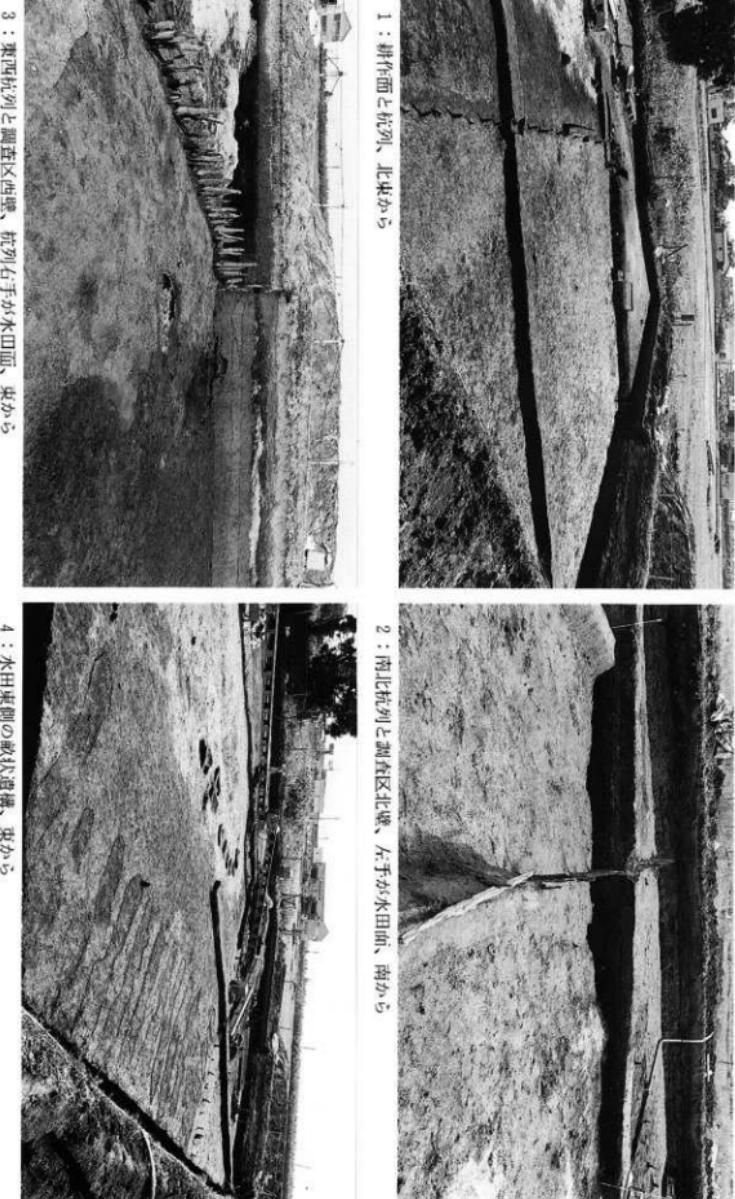


Fig.87 F区西端の水田遺構 写真（遺構図はFig.29）

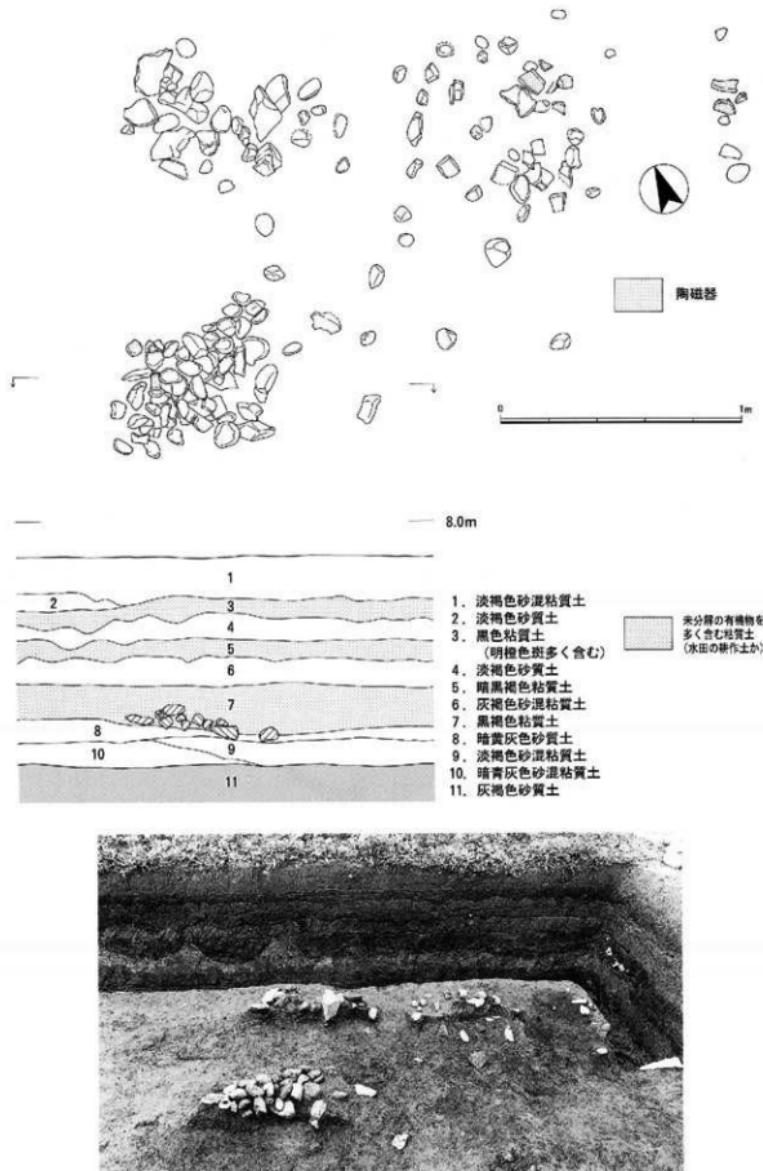


Fig.88 SX03 (18世紀後半以降、陶磁器・礫集石) 遺構実測図 (S=1/20)・写真

2. F区 その他の土坑・溝出土遺物

F区の東側には無数の土坑や溝が密集して確認された（F区全体図Fig. 27）。このうち中近世の上坑墓等については前節で扱ったとおりであるが、その他にも機能が明らかでない土坑、溝が多数ある。これらから出土した遺物の中で図示可能なものについてFig. 89、90に実測図を、Fig. 91以降に写真を掲載した。

各遺構の平面図はFig. 29～36の遺構配置図に示しており、掲載図の図番号は遺物観察表中に記載している。

土坑出土遺物の大半は中世後半～近世前半の土師質土器壺と皿で、比較的残存状態の良好なものは前節で述べた上坑墓に副葬された可能性がある。これ以外にはSK307の肥前系

陶器皿（17世紀中頃以降）と瓦質土器火鉢口縁、P 59の土鍤があるほか、Fig. 91に写真のみ掲載したものとしてSK50青花皿、SK141美濃灰釉陶器皿（ともに16世紀後半～17世紀初頭）、SK210龍泉窯系青磁碗B 2類（14世紀頃）、SK285龍泉窯系青磁碗C 2類か（15世紀頃）があるが、概して中世以前の遺物を含む土坑は少ない。

F区の溝遺構については幅が細く浅い小水路状のものが多く、少量の遺物が出土している。17世紀代の肥前系陶器が出土したSD07、08、14があるほか、浅い窪み状の不定形な溝SD19、20（同一の遺構とみられる）からは古墳時代後期後葉墳の須恵器がまとめて出土している。

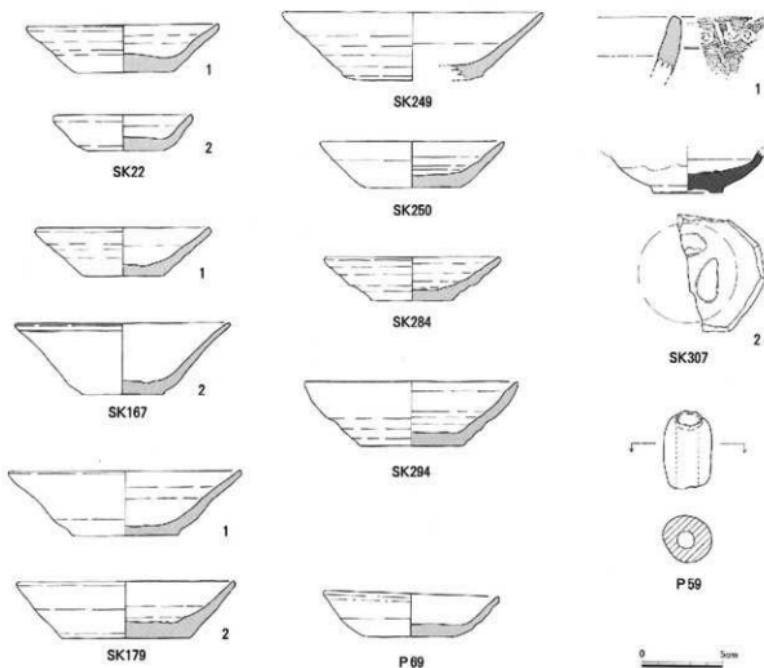
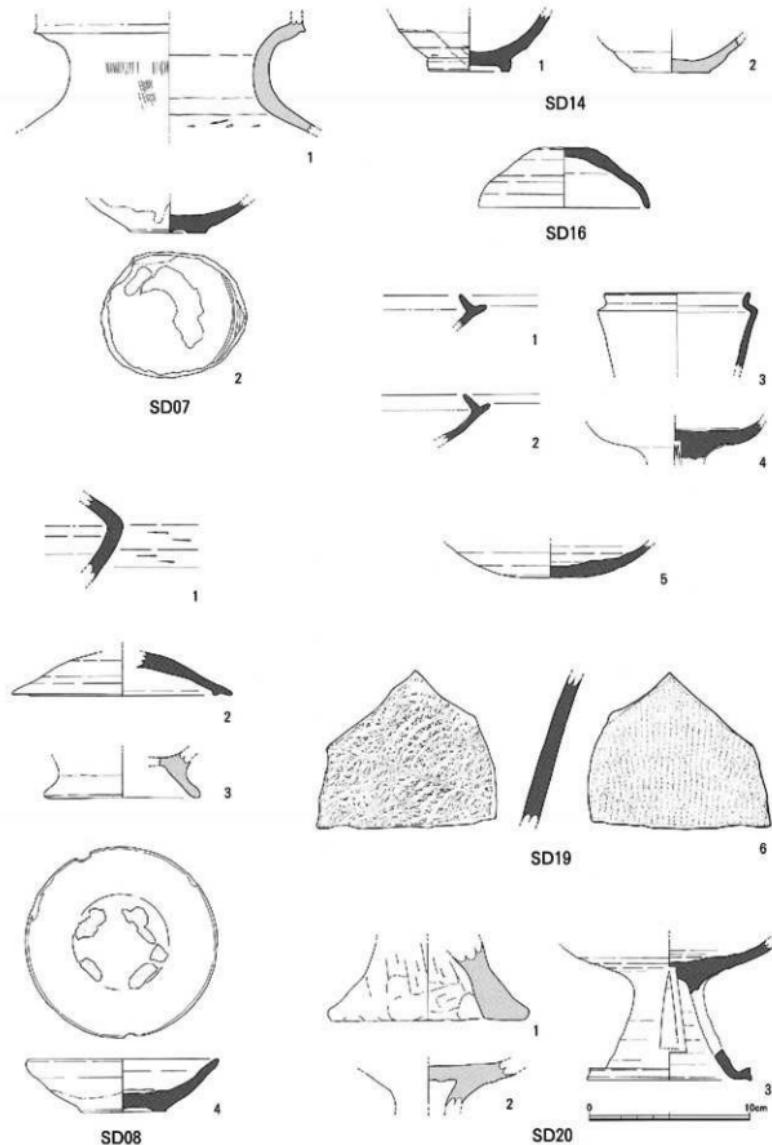


Fig. 89 F区土坑出土遺物 実測図 (S = 1/3)

Fig.90 F区溝出土遺物 実測図 ($S = 1/3$)

Tab.12 F区土坑出土遺物観察表

遺構名	器種別	形状	法量(cm)		色調	調査(内面/外面/特記事項)	残存度	測定寸法
			口径	高さ				
SK22	上部質土器	环	12.0	2.9	6.0	明粉色 内外灰:回転ナメ/底面:回転糸切り	70%	32
		皿	8.7	2.3	4.7	明粉色 内外灰:回転ナメ/底面:回転糸切り	完形	
SK141	土質灰陶輪器	环	-	-	深黄白色	高台内縫胎	20%	35
		环	13.4	4.5	5.0	接合部 内外灰:回転ナメ/底面:回転糸切り	60%	32
SK167	上部質土器	环	11.0	3.0	4.8	浅青褐色 内外灰:回転ナメ/底面:回転糸切り	60%	32
		皿	13.5	3.5	7.8	崩壊物 灰色 内外灰:回転ナメ/底面:回転糸切り	60%	30
SK179	上部質土器	环	11.5	2.7	4.9	浅青褐色 内外灰:回転ナメ/底面:回転糸切り	40%	33
		皿	11.5	4.0	6.5	浅青褐色 内外灰:回転ナメ/底面:回転糸切り	50%	30
SK210	上部質土器	环	-	-	無彩色	外周に墨跡化した墨文書	小片	33
		环	16.2	4.3	6.9	暗青褐色 内外灰:回転ナメ/底面汚れし不明	20%	32
SK249	上部質土器	环	11.5	3.0	5.8	明粉色 内外灰:回転ナメ/底面:回転糸切り	40%	32
		皿	11.0	2.7	4.9	浅青褐色 内外灰:回転ナメ/底面:回転糸切り	40%	33
SK285	上部質土器	环	-	-	褐色	片切面の端擦み、裏面開口	小片	30
		皿	-	-	褐色	外周:回転ナメ/底面:回転糸切り	40%	31
SK294	上部質土器	环	13.2	4.1	6.2	灰青褐色 内外灰:回転ナメ/底面:回転糸切り	70%	36
		皿	10.8	2.9	2.9	にせい褐色 内外灰:回転ナメ/底面:回転糸切り	30%	33
SK307	瓦質土器	火鉢	-	-	灰青褐色	表面炭素吸収、外周2条の房継間に双溝文	小片	33
		皿	-	-	4.4	淡緑灰白色 侈口沿み 体部下端絞り/削りだし高台	10%以下	
P69	肥前系陶器	皿	11.7	3.0	1.1	灰青褐色 全面:ナメ	完形	36
		皿	11.7	3.0	1.1	灰青褐色 全面:ナメ	完形	

Tab.13 F区溝出土遺物観察表

遺構名	番号	種別	基盤	法量(cm)		色調	調査(内面/外面/特記事項)	残存度	測定寸法
				口径	高さ				
SD07	1	古式土器	皿	-	-	内	内面:白面;脚部ヨコナメ、肩部以下へケツリ/外 面:糊跡ナメ	開口部、底面 全周約40%	35
			瓶	-	4.7	内	内面:糊跡による2条の界線、見込みに剥離/ 外:2条の白露胎、高台台面に兜縫目立つ。 口に回転糸切り	底面・全体 下平、60%	
SD08	1	須恵器	壺頸	-	-	内	内面:糊跡ナメ/外面:回転ナメ、肩部以下回 転ヘラケズり、外周に自然縫	10%以下	27
			環	(13.6)	-	内	内面:糊跡ナメ/外:白露胎、天井部回転ヘラケズ り、外周に自然縫	全体、全 周の20%	
SD08	2	須恵器	壺	-	9.4	内	内面:糊跡ナメ/外:白露胎	全体、全 周の20%	
			环	-	-	内	内面:糊跡ナメ/外:白露胎	全体、全 周の20%	
SD14	1	須恵器	碗	-	5.0	内	内面:糊跡ナメ/外:糊跡ナメ、天井部回転ヘラケズ り、内周に自然縫	下平の多く 立形の10%	35
			上部質土器	皿	-	内	内面:糊跡ナメ/外:糊跡ナメ、天井部回転ヘラケズ り、内周に自然縫	全体、全 周の50%	
SD16	1	須恵器	碗	-	-	内	内面:糊跡ナメ/外:糊跡ナメ、天井部回 転ヘラケズり	全体、全 周の50%	31、 33、 34
			上部質土器	皿	-	内	内面:糊跡ナメ/外:糊跡ナメ、天井部ヘラ切りの後不対方向	全体、全 周の10%以下	
SD19	1	須恵器	环身	-	-	内	内面:糊跡ナメ	糊跡のみ、全 周の10%以下	34
			須 沢 器	环身	-	内	内面:糊跡ナメ	糊跡のみ、全 周の10%以下	
SD19	2	須 沢 器	环身	-	-	内	内面:糊跡ナメ	糊跡のみ、全 周の10%以下	
			須 沢 器	皿	-	内	内面:糊跡ナメ	糊跡のみ、全 周の10%以下	
SD19	3	須 沢 器	环身	9.0	-	内	内面:糊跡ナメ	糊跡のみ、全 周の10%以下	
			須 沢 器	碗	-	内	内面:糊跡ナメ	糊跡のみ、全 周の10%以下	
SD20	1	土製品	上部	-	-	内	内面:糊跡ナメ/外:糊跡ナメ、底面:平行タキ 子	糊跡のみ、全 周の10%以下	34
			上部	高杯	-	内	内面:糊跡ナメ/外:糊跡ナメ	糊跡のみ、全 周の20%	
SD20	2	土製品	高杯	-	-	内	内面:糊跡ナメ/外:糊跡ナメ	糊跡のみ、全 周の10%以下	
			須 沢 器	高杯	-	内	内面:糊跡ナメ/外:糊跡ナメ	糊跡のみ、全 周の60%	

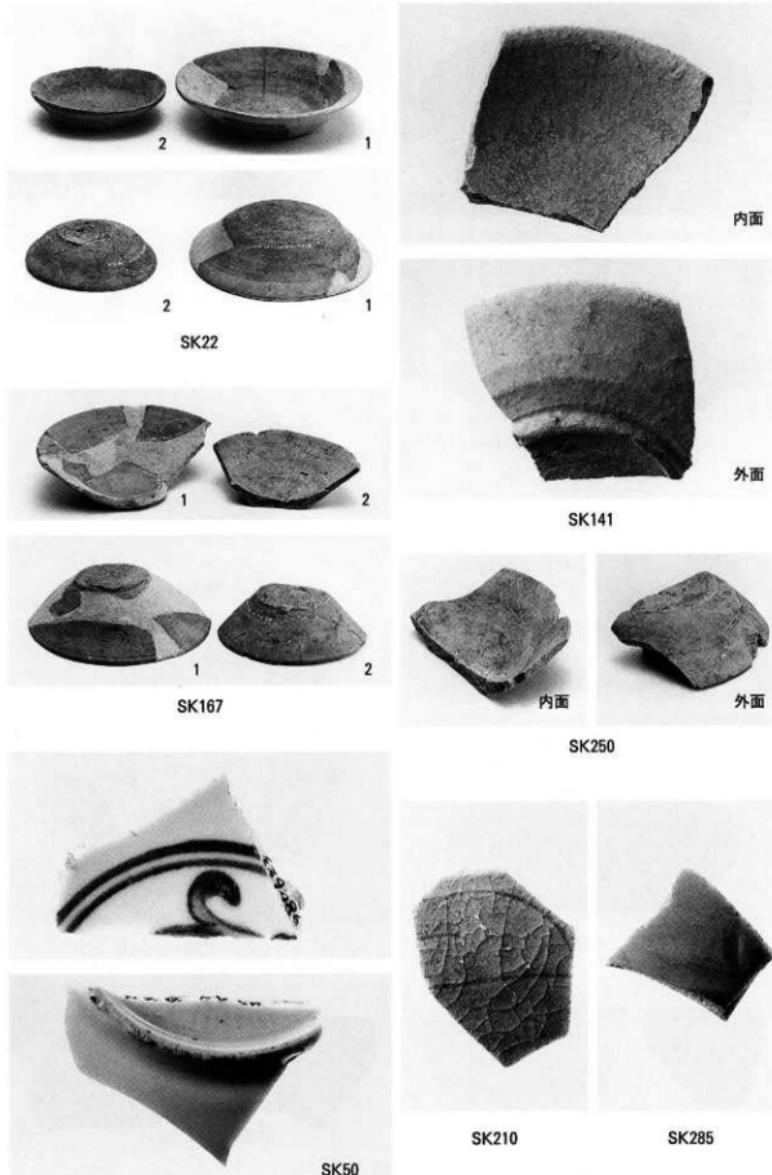


Fig.91 F区土坑出土遺物 写真①

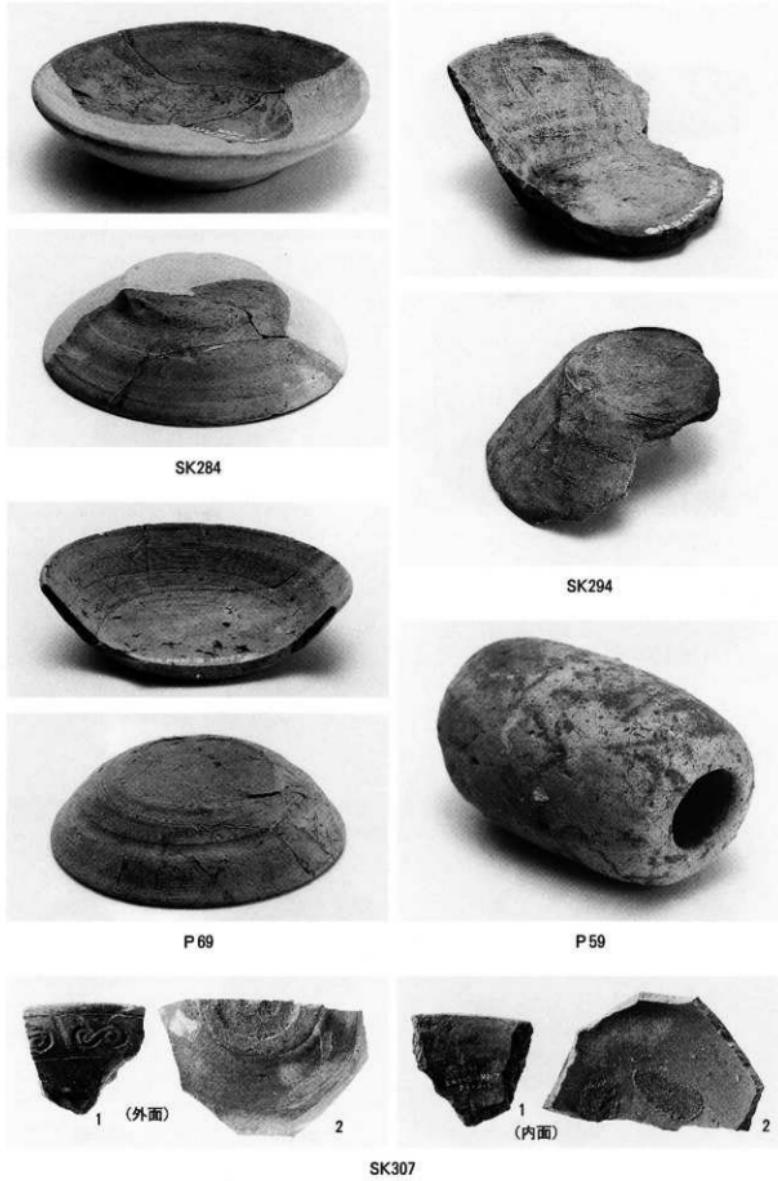


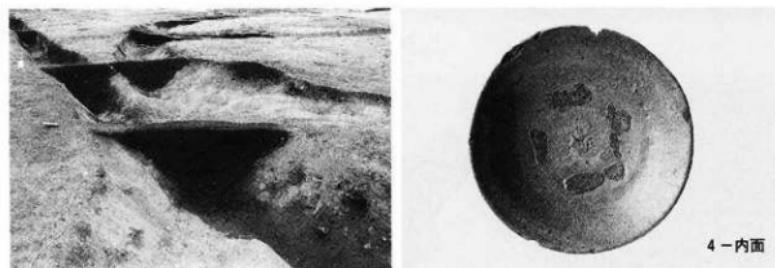
Fig.92 F区土坑出土遺物 写真②



SD07



4



4 - 内面

SD08

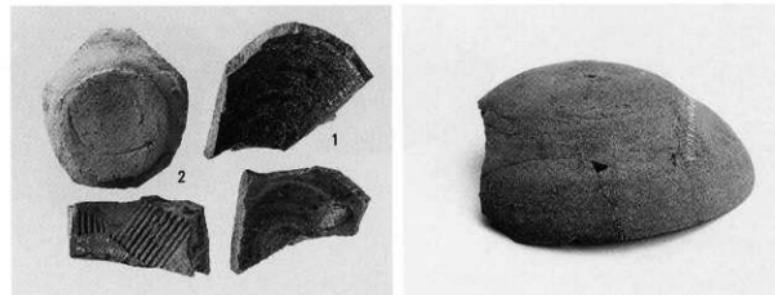
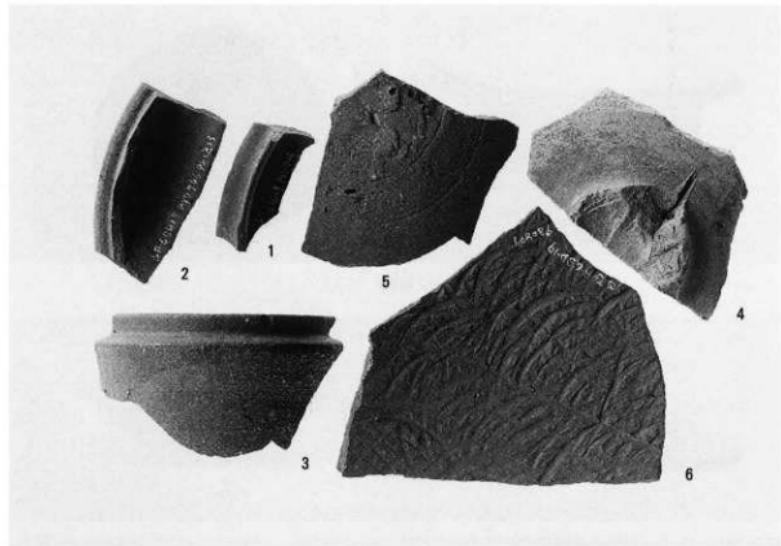


Fig.93 F区溝出土遺物 写真①



SD19



SD20

Fig.94 F区満出土遺物 写真②

第6章

G区の調査成果

章0葉

果物査定の図

第6章 G区の調査

第1節 G区の位置と概要

1. G区の位置と面積

G区は古志本郷遺跡の北西寄りに位置し、西側にはF区が、東側にはH区が隣接する。なお隣り合うF区・H区との境界は現代の市道であり、調査区の区割りは調査進行上の便宜的なものである。G区の遺構全体図はFig. 95に示した。また、周辺図および広域図はFig. 3、4、6に示している。

G区の中には農業排水路が走っており、コンクリート擁壁やU字溝が深く埋め込まれている。この排水路は調査終了後も使用されることと、遺構が壊されていると判断されることを理由に、排水路部分は調査をおこなっていない。この排水路を境界に、G区を3つに分けて呼称している。調査面積はそれぞれ以下のとおり。

	G 1 区	G 2 区	G 3 区
上端(現地表)	525m ²	3,143m ²	1,285m ²
下端(遺構面)	494m ²	2,991m ²	970m ²

上端は現地表面レベルでの面積、下端は安全勾配を確保した法じりの、遺構面レベルでの面積である。3つの調査区を合計すると、G区全体の調査面積は上端で4,953m²、下端で4,455m²である。

斐伊川放水路事業の着手前のG区は、宅地・畑地・水田として利用されていた。

2. G区調査成果の概要

G区で確認した遺構は、掘立柱建物跡19棟、柵列2列、溝跡13条、井戸跡1基、土坑108穴である。遺物は包含層から4,400点余りの土器破片（第4章第2節参照）が出土したほか、遺存状態の良い土器等が溝跡から多数出土している。

G区の調査成果のうち、おもな内容をまとめると以下のとおりである。

- ・弥生時代前期の溝（SD29）

- ・古墳時代前期の溝、土器の多量投棄（SD41）

- ・古墳時代後期後葉（6世紀末～7世紀初頭）の溝跡、上面に廃棄された多量の土器（SD39）

- ・奈良時代の大型掘立柱建物群

- “ 建物を区画する溝跡・柵列

3. G区の地形

調査前の地表面の標高はG 1区とG 2区が8.6m前後であった。遺構面（地山上面）の標高は調査区南側が高く最高で8.5m、神戸川に近い北側に向けて徐々に低くなり、G 3区が急激に低く7.9mほどである。G 3区の北辺は、地山面が削られてさらに低くなっている、遺構は残されていない。

4. 遺構の分布状況

G区は東西150m、南北45mと東西に細長い。遺構は調査区全体に分布しており、目立った粗密は無い。ただし遺構の種類ごとに見ればある程度のまとまりが認められる。まず溝跡については時期の異なる数条が、近接して調査区北側を斜めに走っている。また奈良時代の建物跡や溝跡、土坑などはG 2区の南東側にまとまっており、切り合って重複関係にあるものも多い。一方、両隣のF区・H区に比べると、中世以降の遺構はきわめて少ない。G 2区東端に近世の溝跡SD42が、またG 1区西端に近年までの宅地と畠跡がある以外は、目立ったものは無い。

5. 次節以降の構成

次節以降はG区の遺構について詳細を述べる。まず第2節では調査区北辺にまとまる溝跡についてその全体像と概要を、また第3節はその中の古墳時代後葉の溝跡SD39について、第4節は古墳時代前期の溝跡SD41について詳説する。また第5節ではその他の遺構について、具体的には弥生時代前期の溝、古墳時代前期の井戸跡、近世の溝跡について詳細を述べる。

なお、G区の遺構で最も特徴的であった、奈良時代神門郡家に関連する掘立柱建物群、溝跡、土坑群などについては、次章第7章でまとめて述べることとし、本章では扱わない。

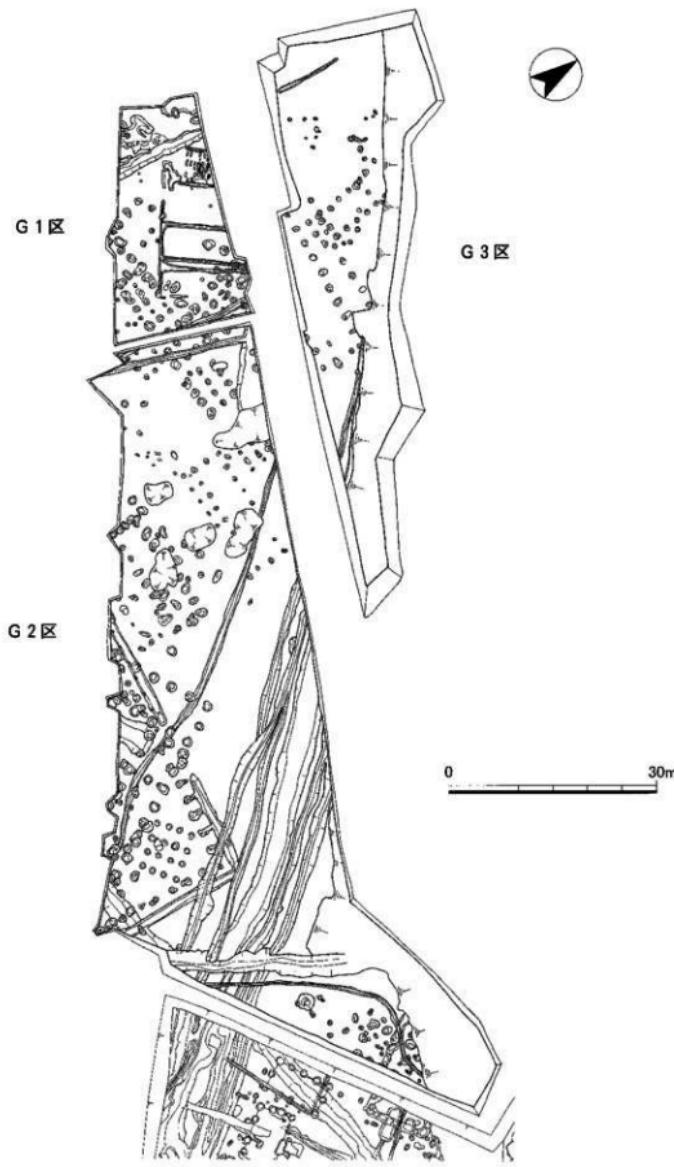


Fig.95 G区全体図 ($S = 1/700$)

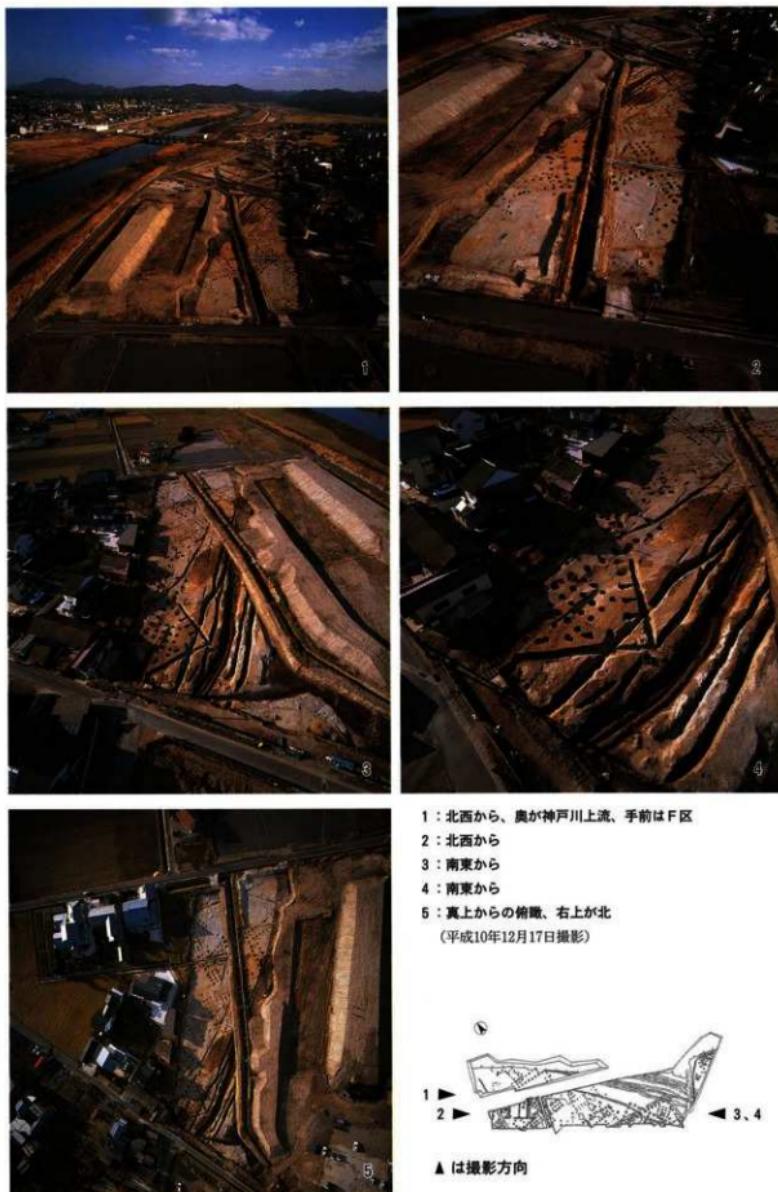


Fig.96 航空写真 G区全体と周辺の環境

第2節 G区 溝跡の調査

1. 溝跡の位置

G2区の東壁からG3区にかけて、南東→北西の方向に流れている数条の溝跡がまとまって検出された。溝跡の全体図はFig. 95に、また主要な部分についてはFig. 97に示している。溝はSD35・37・38・39・40・41の6条で、いずれも平行して、しかも近接して走っている。またこれらと10mほど距離をおいて、SD34がやはり平行に走っている。これらの溝は、G区の東に隣接するH区に続くもので、H区の南辺をかすめて調査範囲から南には流れていく。溝の方向と溝底の高低差から推定すると、本来は遺跡の南側にある微高地から流れてきて、F区の北側辺りで神戸川本流と合流するものと考えられる。なお調査の区割り上異なる遺構名をついているが、G区SD35がH区SD60と、G区SD39がH区SD59と、G区SD41がH区SD58とそれぞれ同一の遺構である。

2. 溝の時期

計7条の溝のうち、遺構内に人為的に廃棄された遺物によって時期が判明しているのはSD39（古墳時代後期後葉）とSD41（古墳時代前期）の2条である。その他の溝については、時期の判明している遺構との重複関係（切り合い）と、埋土中に混入している遺物

によって時期の上下限をおさえることができる。これによって各溝の時期を示すと下のTab. 14のとおりである。

これをまとめると、SD40が古墳時代前期以前、SD41が古墳時代前期（埋没時期）、SD38・35・39がいずれも古墳時代後期で、このうち最も新しいSD39が古墳時代後期後葉に埋没、SD34は弥生時代以降8世紀末以前ということになる。

やや煩雑になるが、各溝ごとに年代検討の根拠になった事項を記しておく。

- SD34は弥生時代の遺物を含み、8世紀末頃の溝SD33に切られている。
- SD35はSD38を切り、SD39に切られる。したがって古墳時代後期以後であるが、後期後葉より新しくはならない。
- SD37は土層からSD35に切られているようだが、同時期に機能していても矛盾はない。
- SD38は埋土に古墳時代後期の須恵器甕を含み、SD35に切られている。
- SD39は上面に古墳時代後期後葉の遺物が多量に廃棄されている。これが溝が埋まつた時期とみられる。
- SD40は平面図に表現できていないが、SD41に切られている。遺物は無い。
- SD41は埋土最上層に古墳時代前期の古式土師器を多量に廃棄していた。したがってこの時期に完全に埋まつたと考えられる。

Tab. 14 G区溝跡時期検討表

弥生時代	古墳時代	古墳時代後期	奈良時代 (8世紀末頃)
	SD40 切り合い SD41	SD38 切り合い SD35 切り合い SD39 (SD37)	(後葉)
SD34		切り合い	SD33

Tab. 15 G区溝跡一覧表

遺構名	時期	上面幅	下面幅	深さ	断面形	流路方向	備考
SD34	奈良時代以前	52~105cm	23~45cm	30~47cm	丸底	南東→北西	遺物はp.182
SD35	古墳時代後期	120~220cm	25~60cm	48~98cm	台形	南東→北西	
SD37	古墳時代後期	80~140cm	30~40cm	43~70cm	丸底	南東→北西	
SD38	古墳時代後期	80~140cm	40~60cm	40~85cm	台形	南東→北西	
SD39	古墳時代後期後葉	390~480cm	190~290cm	81~97cm	VVV字形	南東→北西	詳細は第3節
SD40	古墳時代前期以前	110~150cm	30~50cm	42~68cm	略台形	南東→北西	
SD41	古墳時代前期	120~200cm	40~55cm	64~99cm	台形	南東→北西	詳細は第4節

3. 溝の外見上の特徴

前項までに検討した溝跡について、幅・深さなどの寸法と、断面形などの特徴をTab. 15にまとめた。上記の項目以外で特記するべき点を以下でふれることとする。なおSD39とSD41については次節以降で詳しく述べる。

SD34は蛇行する浅い溝で、断面形は基本的に丸底を呈する。埋土は暗褐色粘質土の單一上層で、砂粒を多く含んでいる。埋土の堆積からは水流の痕跡を窺うことはできない。なお、弥生時代の壺・甕底部破片が出土した。SD34については本章第5節で遺物実測図と写真を掲載している。(p. 182)

SD35の埋土は基本的に水平堆積しており、掘り直しによる切り合いなどはみられない。埋土を分層して図示したが、実際には漸移的に変化していくため境界は判然としない。全体として、細砂粒を少量含む粘質土が均質に堆積している。基本的に粒子の大きなものは含まれず、急激な水流による短期間の堆積層はない。下層の方が比較的土色が明るく、上層ほど黒味が強い。これは下層のほうに有機物の分解が進み土壤化しているためか、あるいは溝が浅くなるにつれて水流が緩やかになり、有機物の沈殿量が多くなったためかもしれない。断面形は一貫して整然としており、底面も平坦に削られている。人工的に掘削された溝・水路の可能性が高い。掘削後は、ゆるやかな水流により、長時間かけて自然に埋まつたことが堆積状況から観察される。古墳時代後期に機能していた溝である。

SD37は断面丸底の溝で、埋土の中位に灰白色砂の水平堆積を含む。一定以上の水量を

持つ流れの作用によって比較的短期間に堆積したものと判断される。上層の観察からSD35に切られるようにも見えたが、両者が時期差をもち併存しなかったと考えるとSD37のプランが途切れることになる。したがって、SD37が埋まつた後、SD35の北西部が掘り直されたものと考える。つまりSD37とSD35の南東部分はある期間1条の溝として同時に機能していたことになる。

SD38はSD35と同様に整然と人工的に掘削されている。SD38が埋まつた後、これを切って規模・断面形のよく似たSD35が掘られているため、両者は時期的に近い同じ機能の新旧溝かもしれない。SD38の埋土は基本的にSD35と類似し、非常にゆるやかな水流による堆積土だが、埋土中位には粒子の大きい灰色砂がまとまって堆積する層がある。箇所によってレンズ状の堆積をする部分も認められる。これは一定量の水流による粒度淘汰を受けた痕跡であり、短期間にやや強い水流があったことをうかがわせる。

SD40はSD39とSDM1の間を、両者と重複することなく平行に走っている。埋土中には遺物は含まれない。Fig. 97の平面図で遺物のドットがSD40上にも及んでいるのは、SD39最上層がSD40を覆うように広がっているためである。SD40の断面形は場所によりばらつきがあるが、基本的に底面は平坦気味である。埋土は明確な水平堆積をなさず、水流の痕跡は認められない。平面図には表現されていないが、SD41に埋土が切られているため埋没後にSD41が掘り直されたと考えられる。

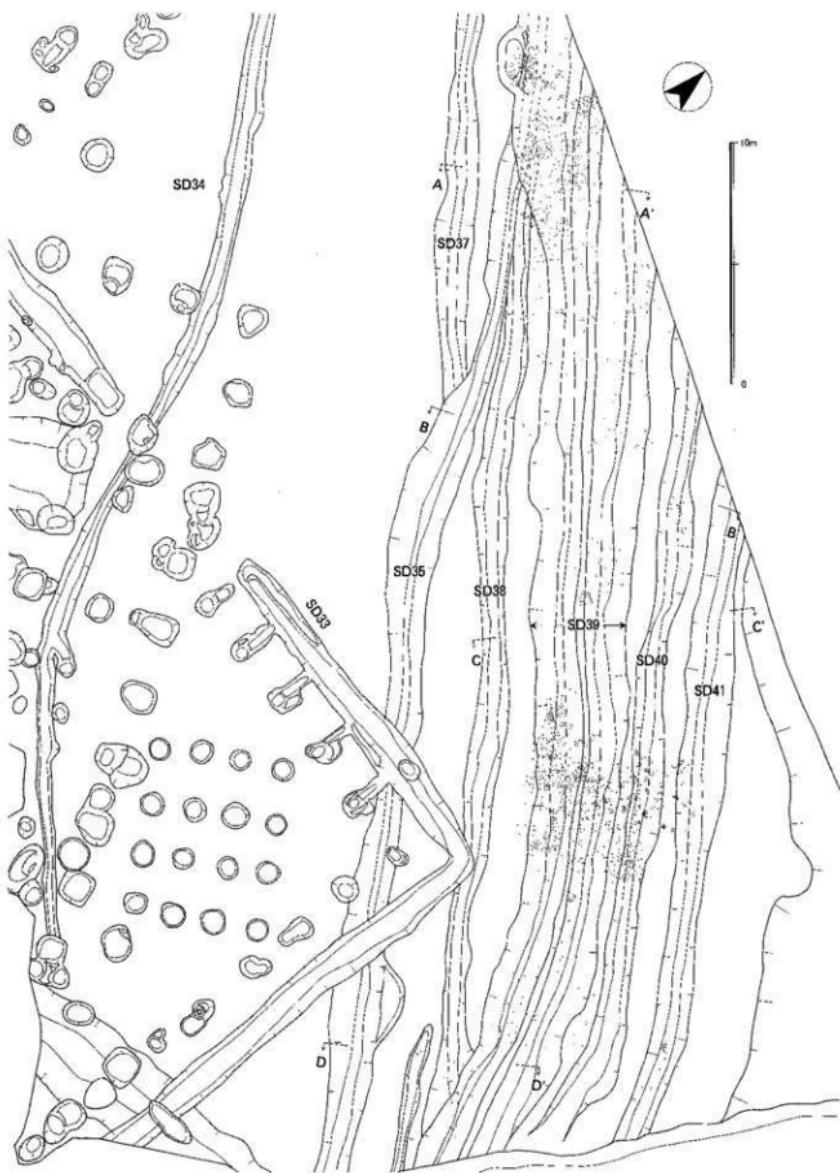


Fig.97 G2区溝跡 遺構配置図 (S-1/200)

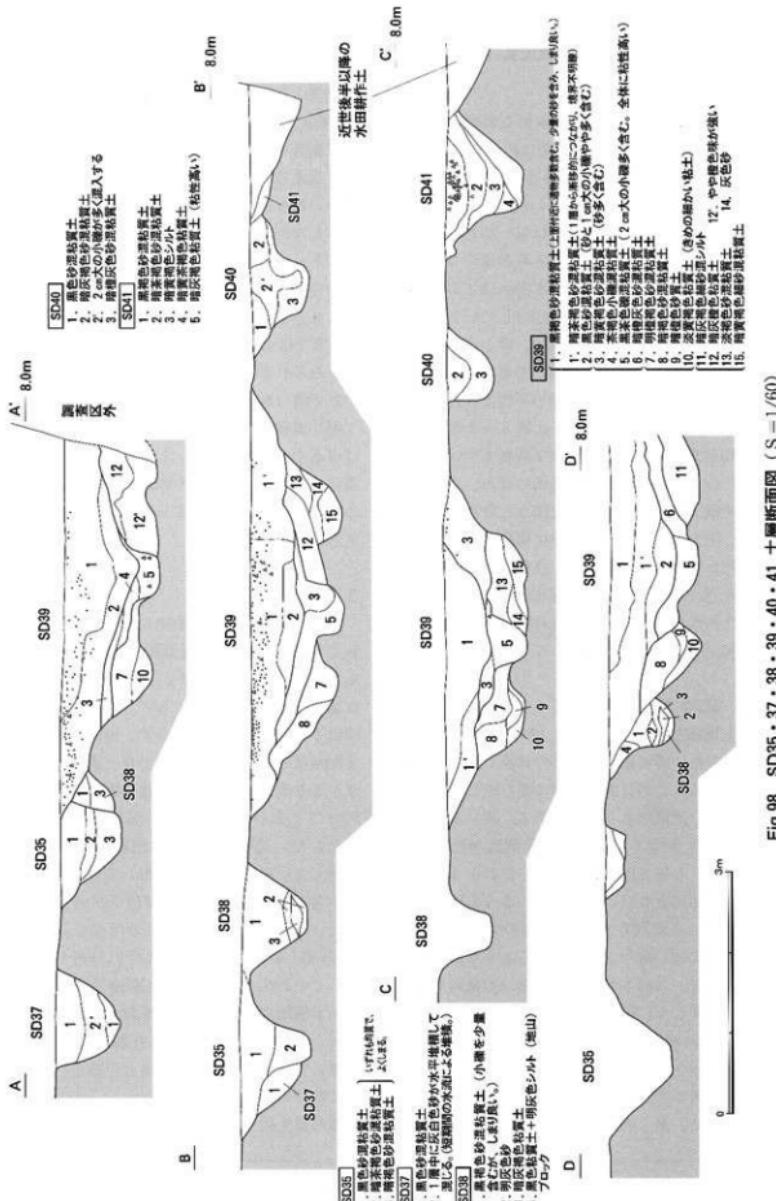


Fig.98 SD35・37・38・39・40・41 土層断面図 (S=1/60)

第3節 SD39の詳細 (古墳時代後期後葉の溝)

1. SD39の概要

SD39はG2区を斜めに横切る複数の大きい溝跡である。平面全体図はFig. 97に示した。幅は検出面で4mから5m、深さは1.2mほどで、F・G区で確認した溝跡の中で最も規模が大きい。溝の方位はN-約45°-Wをとる。下層と中層にはほとんど遺物を含まないが、最上層にあたる厚さ30cmほどの堆積上中に極めて多量の遺物を包含している。遺物は年代的にばらつきがなく、溝がほぼ埋まりきる頃の短期間に人為的に廃棄あるいは放置されたものである。遺物の年代は後述するように古墳時代後期後葉、山雲4~5期(ほぼ陶邑TK209型式~飛鳥編年飛鳥I型式に併行)のもので、多種の須恵器のほか、土師器甕・瓶・移動式壺・上製支脚など煮炊用具も多く出土している。基本的に集落における一般的な器種構成であるが、注目されるのは鉄製大刀、手捏ね土器、土器などの特殊な遺物が含まれる点である。遺物の総量は重量にして94,100gであった。

2. SD39 埋土の堆積状況

土層断面図をFig. 98に、同写真をFig. 100に示した。溝の底面は平坦では無く大きく凹凸がある。これは溝最深部に掘り返しによる切り合い関係があるためである。深い掘削は最低でも3回あり、その結果溝底の断面は「VVV」という形をしている。これら3条の溝最深部はきれいに平行しているうえ底の高さがほとんど同じため、SD39の完掘時には溝底面に細い溝が3条平行するようにならなかった。この3条の溝最深部は中央のものが最も新しく、両側の溝、すなわち北と南の壁沿いの溝はこれに切られている。写真(Fig. 100)でも明確に見て取れるように、中央の溝の埋土は有機物を多量に含む黒味の強い上で、最上層の遺物包含層に漸移して連

続するが、両脇の溝の埋土は褐色系の明るい土色で様相が全く異なる。両側の溝埋土にも最上層と同時期の遺物が含まれるため、一定期間溝として機能したはずであるが、極めて短期間に埋没してしまったとみられる。

完掘時の見かけでは壁面が急角度で底幅が広く見えるが、実際に溝として機能していた最後の掘り返し後には、傾斜がゆるやかで中央部だけが一段深くなるような二段掘りの形状であったことが層位の切り合いでわかる。この中央構最深部の埋土はFig. 98の5層にあたり、2cm人の小標を多く含んでいる。この段階では溝幅は狭く、ある程度の水量があったとみられる。その後溝が堆積物で埋まるにつれて溝は幅広で浅いものとなり、最上層の1層が堆積する段階では粒子の大きい構造物はほとんど含まれない。したがって水流は非常にゆるやかで、周辺や水際の植物に山米する有機物が豊富に堆積する環境にあったと推定される。

3. 遺物の出土状況

上記の最上層1層に集中して遺物が含まれている。Fig. 98の断面図で遺物の垂直山上分布をドットで示した。ドット1つが主要な遺物破片1点に対応する⁽¹⁾。遺物は溝の中層以下にはほとんど含まれず、検出面から深さ30cmほどの間に集中しており、溝がほぼ埋まりきる前後に集中して土器が廃棄・放置されたことを示す。また、平面分布をFig. 97に示した。遺物のドットはSD39の溝幅輪郭を越えて、両側にも広く分布している。出土状況写真Fig. 99-2でその様子が分かるように、遺物はSD39の上面だけでなく、北隣のSD40・41の上面を覆うように分布している。これはSD39が埋没する最終段階に、溝幅が平面図に示した範囲を越えてより広くなってしまった結果である。すなわち最終的にSD39は溝というよりも、幅10mほどの細長い溝状になっていたことを示す。

溝の埋土最上面、すなわち当時の地表面は

(1) なお、ドットは七層断面ラインから奥を、かつ次の断面ラインの手前までを見通して示したものである。また△は古墳時代前期の古式上部器を示す。

後世にいくぶん削られているものの、検出面からそれほど高くはなかったと推定される。上記の点から、遺物が廃棄・放置される前後の状況を復元すると、以下のようなよう。

溝が最初に掘削された時期は不明だが、古墳時代後期の遺物を含むSD38を切っているので、古墳時代後期の間に最初の掘削がおこなわれたと考えられる。その後は2回以上の掘り直しがおこなわれ、最終的には幅4~5m、深さ1.2m以上の2段掘りの溝となった。この段階ではかなりの水量があり、おそらく微高地に展開していた集落から神戸川への主要な排水路として機能していたとみられる。これが有機物を中心とした堆積物で徐々に埋まり、最終的には本米の溝幅からあふれるように幅10mほどのゆるやかな自然流路状になる。実際には日常的にそれほど水量は無く、湿地化が進んでいたとみられる。このような神戸川へ連なる湿地状の地点、集落からみれば神戸川川べりの草むらの中の小川のような場所に遺物を遊び、廃棄・放置していることになる。

なお、SD39の東側（溝の上流側）は調査区の外へ続いており、溝自体がどこから流れてくるのかは不明だが、当遺跡の既往の調査でC区を東西に流れる同時期の溝SD18が確認されており、これと一連の溝であった可能性もある。ただし両者の間には300mの隔たりがあり、現段階ではあくまで可能性を指摘するにとどめる。

4. 遺物内容の概要

SD39上面から出土した遺物の総量は、重量にして94,100gであった。遺物の内容はTab. 16の集計表にまとめたおりで、最も多いのは土師器の甕である。甕に集計したものの中には、瓶の体部なども含まれるが、これらを含めた土師器煮炊具の割合が高い点が注目される。また、北西寄りの遺物集中部には大刀2振りと土玉5点、手捏ね土器1点などの特殊な遺物が集中して出土し注目される。少なくともこの集中部については集落で使用された破損品や不要品の投棄とは考えられず、祭祀行為のなかで意図的に掘え置かれた器物とみられる。それ以外から出土したものについては基本的に一般集落内における器種組成と異なる点はなく、破損品を集落の外、川べりに廃棄したとみることもできよう。

5. 遺物の分布状況

G区内で検出したSD39は長さ50mほどである。遺物はこの間にまとめて出土している。これらの出土位置を種別ごとに区別して図示したものがFig. 101と102である。分布には粗密があり、西側のG2区壁際と中央東寄りの2箇所に、遺物が集中して出土する地点が認められる。種別・器種ごとに見ると、とりたて偏りはないものの、南東寄り（Fig. 102）に須恵器甕の破片が集中する箇所があり、1個体がこの周辺で破壊された可能性が考えられる。

Tab. 16 SD39上面出土遺物 集計表

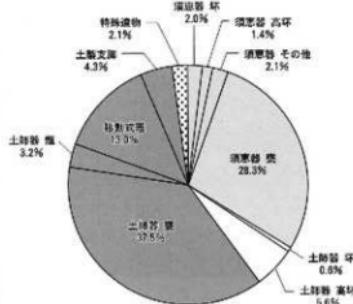
須恵器	
蓋 瓶	1,860 g
高 瓶	1,300 g
そ の 他	1,960 g
甕	26,600 g
小 計	31,720 g

土師器（供膳具）

甕	520 g
高 瓶	5,240 g
小 計	5,760 g

土師器（煮炊具）

甕	35,320 g
瓶	3,000 g
移動式竈	12,220 g
土製支脚	4,070 g
小 計	54,610 g





1. 右からSD37・35・39完掘時、
北西から



2. SD39上面の遺物出土状況、
南東から

Fig.99 G 2 区溝跡 遺構写真